山手学院中・高等学校

土　曜　講　座

2004年6月5日

父母の会

田　中　文　夫

山手学院中・高等学校

建学の精神

世界を舞台に活躍でき、

世界に信頼される人間の育成

土曜講座における学校長の期待

土曜講座オリエンテーションから

- １０年～２０年先を見据え、土曜講座はその一環としての活動と位置づけている
- 現代の子は自己表現力は身についてきたが、一皮むくと「力」がない
- クリエイティブな生きる力が身につくよう、そのきっかけとなればよい
- 倫理観や歴史観等、伝統を継承したものの上に築いてゆきたい

青春のヒマラヤに学ぶ

知の冒険･心への探求

青春のヒマラヤに学ぶ

第１部　：　青春のとき

失敗のヒマラヤ登山に学ぶ！

＜無意識な存在に気づく＞

第２部　：　今も心は青春　→　ヒマラヤに学ぶ

知の冒険･心への探求

＜哲学的アプローチ＞

第 1 部

青 春 の と き

失敗のヒマラヤ登山に学ぶ

＜無意識な存在こそ大切！＞

青　春　とは

↓

情　熱

↓

↓

抑えきれない心の衝動

↓

生　命　の　営　み

生命の営み

↓

社会を通し、時間と共に変化する

↑

重要　：　一人ひとり変化のスピードが違う

幼年期　：　自我の主張　（生命の自己主張）

↓

少年期　：　自我の不安　（自己に確信が持てない不安）

↓　　＜青春のとき＞

青年期　：　自我の確立　（他者との関係の中で自分をつくる）

↓

壮年期　：　自我の貢献　（他者への貢献が自己の喜び）

↓

老年期　：　自我の発振・収束（無我：悟り　or　幼年期へ戻る）

↓

死　　：　ひとつの生命の営みが終わる

私の青春

18才 ： 登山を始め山を通して自分と対話

・貧しくて大学へ行けなかった ～ 独学の始まり

・死との対話と青春のロマン ～ 哲学と美への傾倒

20才 ： 韓国遠征（ウルサンバイ初登攀）

・1＄＝360円時代の海外体験 ～ 100＄遠征

28才 ： 初めてのヒマラヤ遠征（P29）

・横浜山岳協会 ～ 名前だけの隊長 ～ 組織と個人

・日本最初、夫婦でヒマラヤ挑戦 ～ そして妻からの離婚話

32才 ： 再びP29南西壁へ挑戦

・遭難～3隊員死亡～隊長の責任

33才 ： 第2の人生

・エヴェレスト山麓の出会い ～ そして再婚

35才 ： 子育て前のアイガー、マッターホルン

ヒマラヤ遠征登山の実際

ネパールヒマラヤ

P29南西壁（7，514m）

1974年
横浜山岳協会
（名目隊長）

1978年
ツラギの会
（隊長）

ヒマラヤ登山のテーマ

① 組織による事業の時代は終わった（文明的）

・適者選抜～（弱肉･強食）　相対的

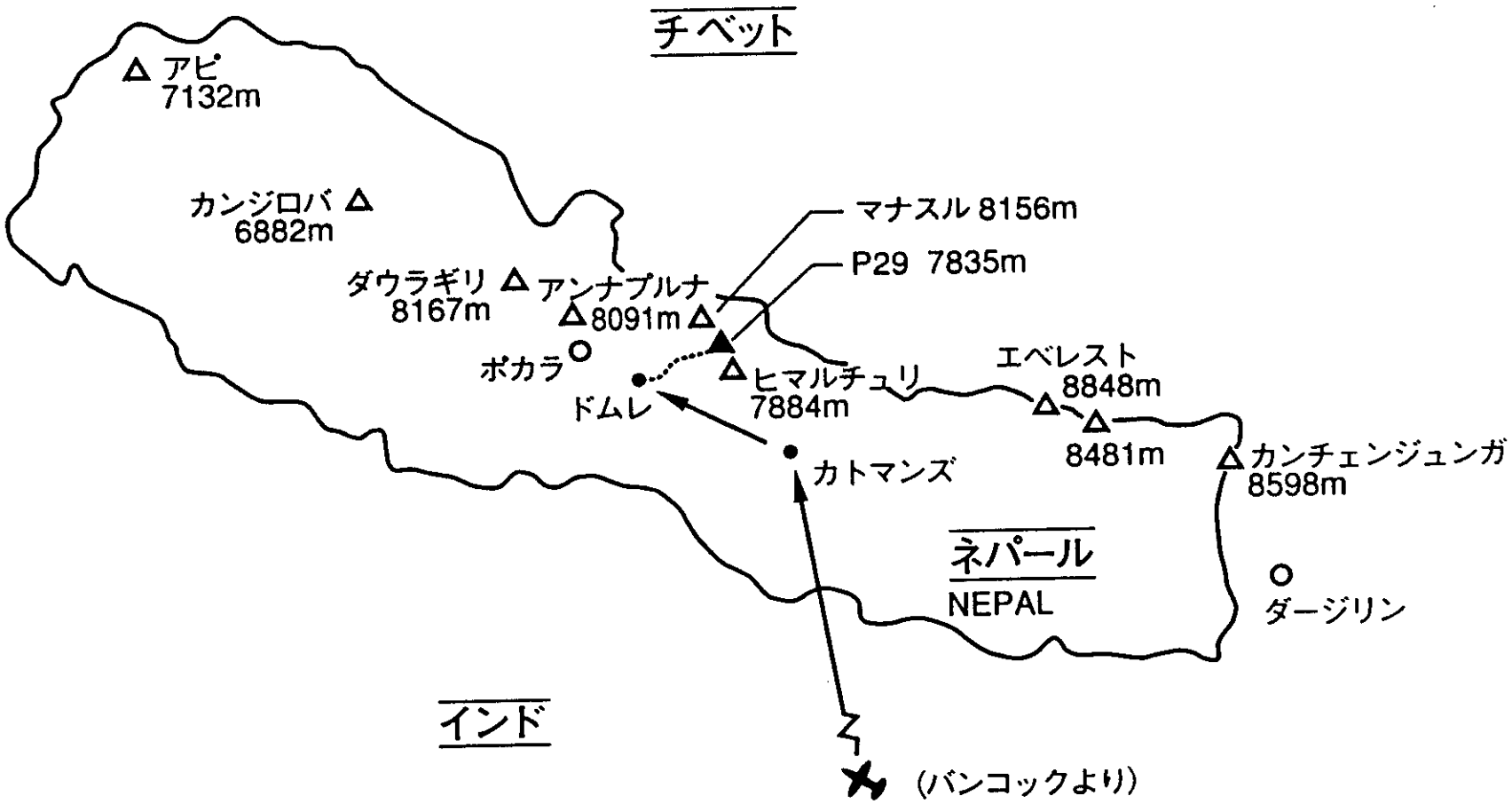
② 意思ある個人が自己表現する時代（文化的）

・自主参加～（レベルの違い）相補的

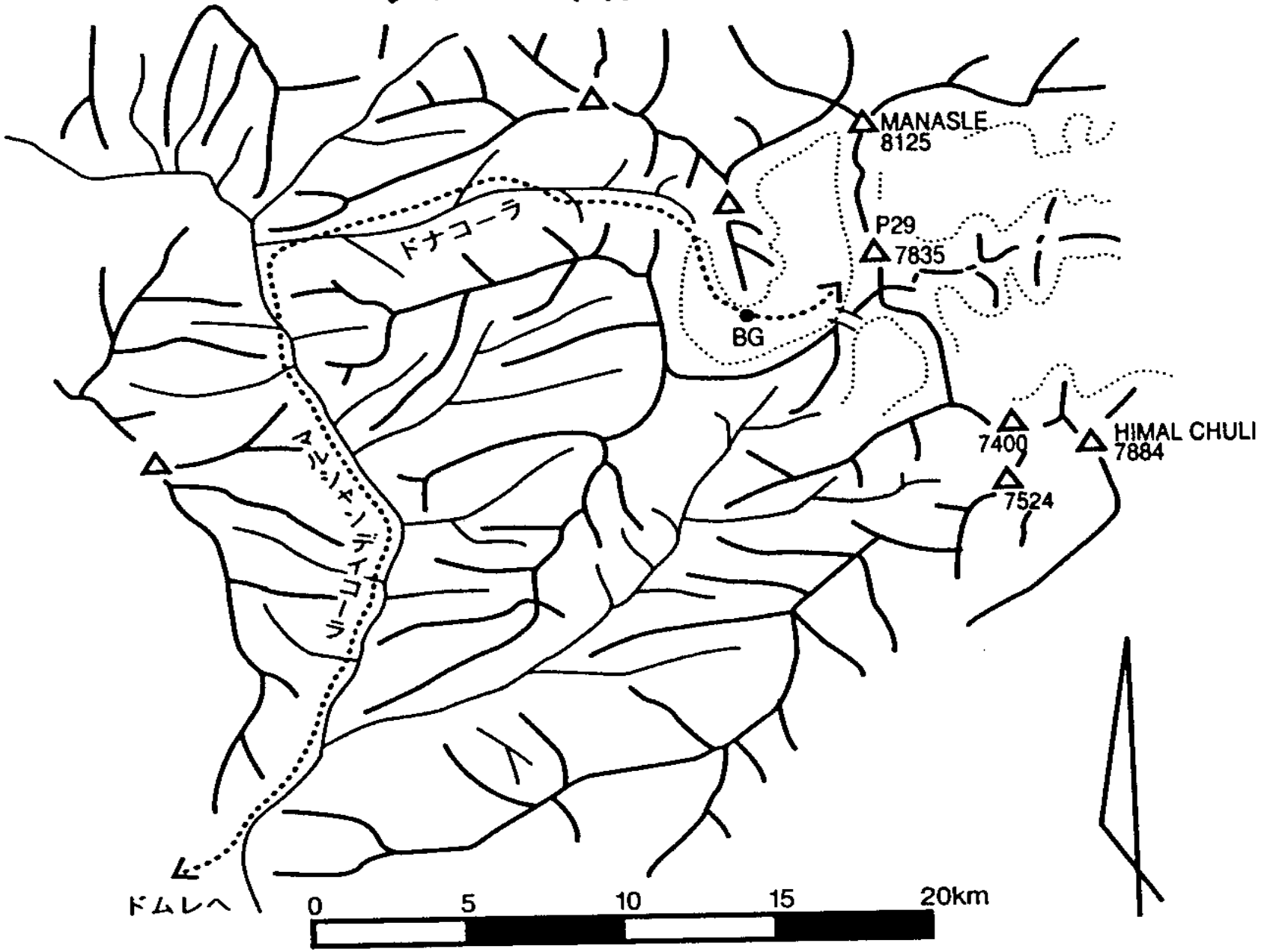
- 目　　的　：　P29南西壁からの初登頂
- 自主参加　：　個としての夢や希望の表現
- 自己負担　：　一人　＝　120万円
- 自己責任　：　基本としての自己責任
- 運　　営　：　（要素）メンバーシップ　：意思
  （機能）リーダーシップ　：組織

＜相補性原理で目標達成を目指す＞

ネパール・ヒマラヤ


チベット
アピ
7132m
カンジロバ
6882m
ダウラギリ
8167m
アンナプルナ
8091m
マナスル 8156m
P29 7835m
ポカラ
ドムレ
ヒマルチュリ
7884m
エベレスト
8848m
8481m
カンチェンジュンガ
8598m
カトマンズ
ネパール
NEPAL
ダージリン
インド
(バンコックより)

マナスル三山概念図


MANASLE
8125
P29
7835
BG
ドナコーラ
アンナプルナコーラ
7400
HIMAL CHULI
7884
7524
ドムレへ
0
5
10
15
20km

1．隊の名称

邦　　名　・　P29南西壁登山隊
英　　名　・　P29 South West Wall Expedition.1978

2．主　　催

ツラギの会

3．後　　援

横浜山岳協会
神奈川新聞社（名義）
TVKテレビ（名義）

4．目　　的

P29南西壁より南峰（7,514m）の初登頂

5．隊の構成

隊長	1　名
副隊長	1　名
隊員	8　名
現地渉外	1　名
留守本部	3　名
リエゾン・オフィサー	1　名
サーダー	1　名
高所ポーター	3　名
コック	1　名
キッチン・ボーイ	1　名
メイル・ランナー	1　名
ローカル・ポーター	2　名
ポーター	165　名

（先発隊：6名，本隊：159名）

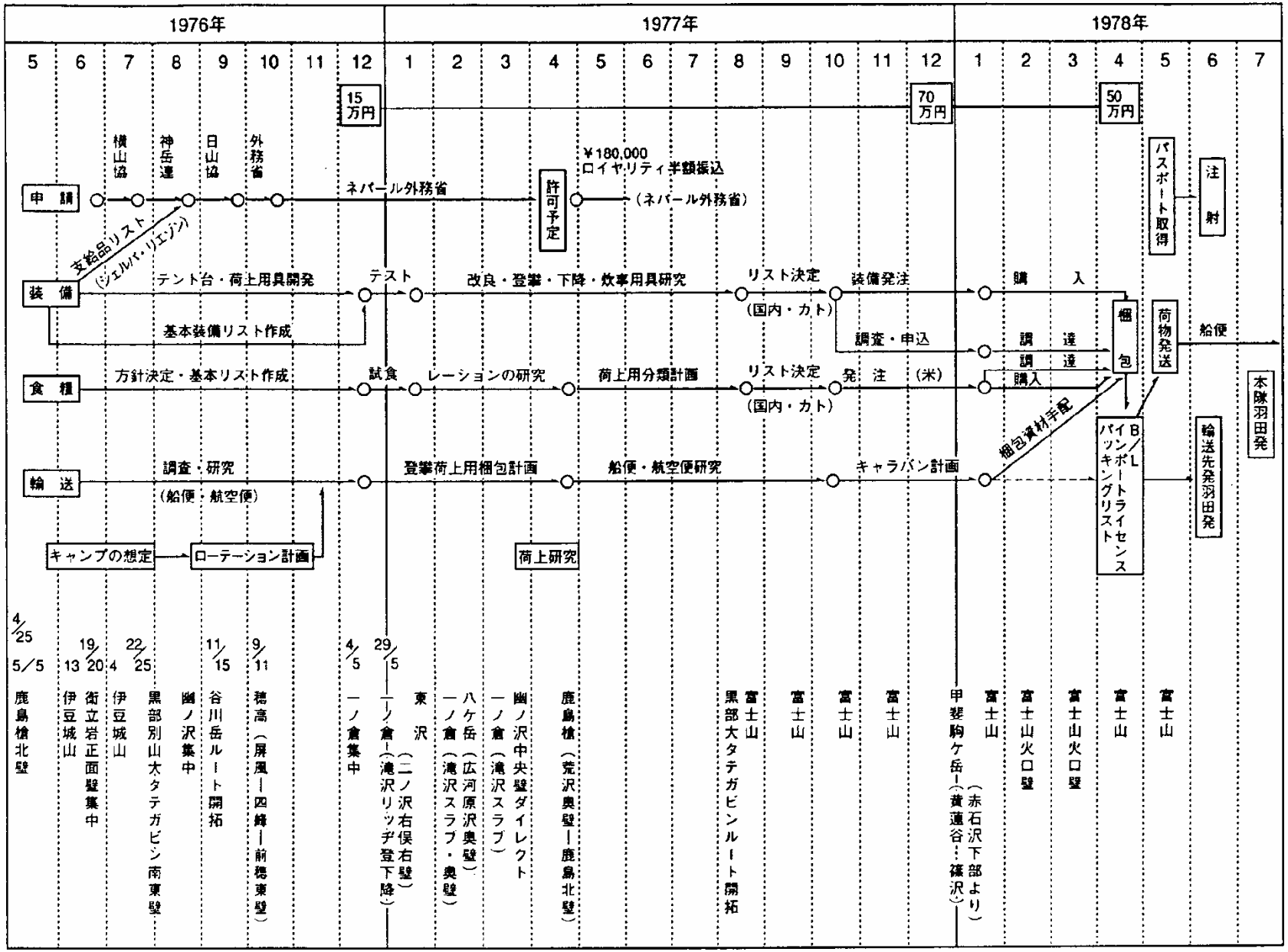
．予　　算

（単位・円）

支出総額	**12,200,000**
国内費	**7,600,000**
食料費	500,000
装備費	2,844,000
輸送費	2,800,000
医薬品	400,000
記録用品	200,000
保険	500,000
事務費	100,000
雑費	100,000
予備費	156,000
国外費	**4,600,000**
登山料	300,000
手数料	92,500
通関料	220,000
輸送費	1,212,500
人件費	701,150
現地購入食料費	500,000
現地購入装備費	700,000
滞在費	460,625
雑費	200,000
予備費	213,225
収入総額	**12,200,000**
隊員負担金	12,000,000（ひとり￥1,200,00）
寄付金	200,000

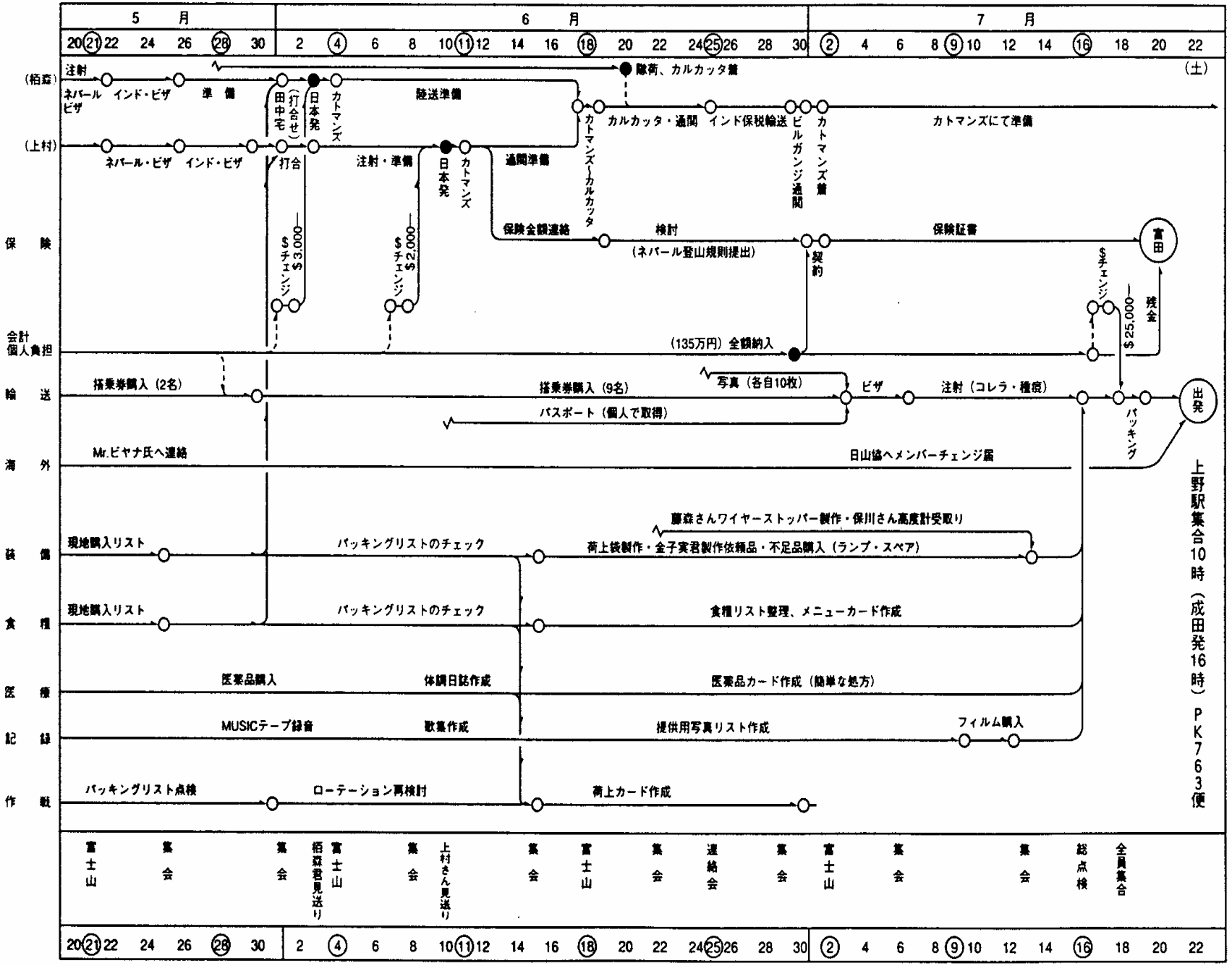
P29 Exp. 準備スケジュール

ツラギの会



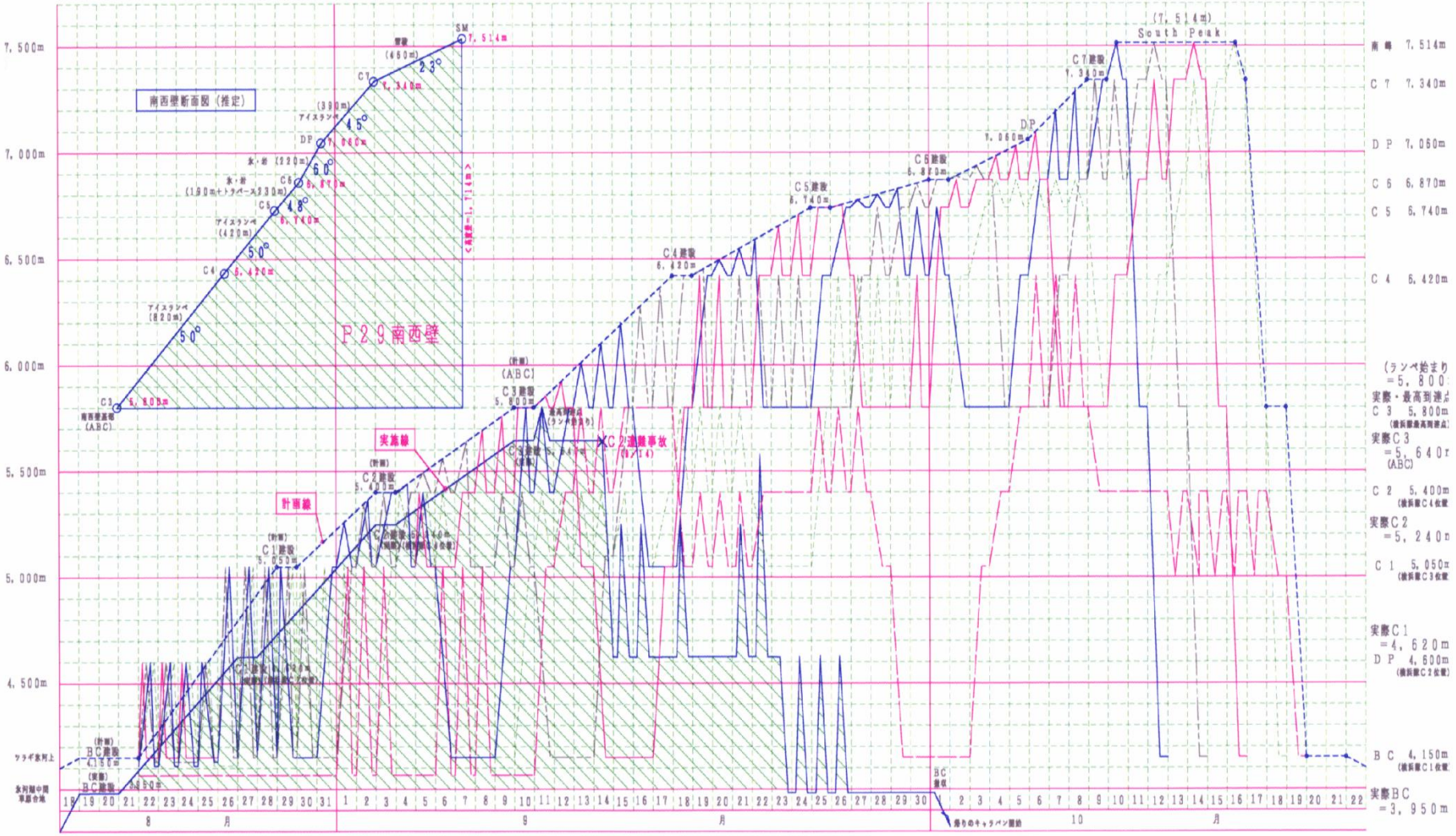
P29 EXP. 1978 SCHEDULE

ツラギの会



P29南西壁登攀計画と実際

計画線と実施線との高度のずれは、高度計の表示値の相違による。C3建設までは、計画とほとんど同じであった。



飛行機の窓から見えるヒマラヤ

一見、雲のよう！

カトマンズ空港

かつての、B－727　イエティ号

カトマンズの銀座通り

今もあまり変わらないが人・車・排ガス・埃の街

中世からのバザール

ゴミ・埃は写らない

船便で送った登山隊荷物（5トン）

横浜→（船）→カルカッタ→（陸送）→ネパール

登山装備

シェルパ族、安全祈願の「カタ」をかけてもらう隊員達

キャラバン出発前の荷物渡し

一人ひとり名簿に登録、タグとタバコ3本をわたす

若い夫婦のポーター

胸にカートンボックスNOのタグ

キャラバン開始（ポーター）

一日約5Km、15日間150kmの道のり

バッティ(茶店)の中

ミルクティー(紅茶)一杯2ルピー(約34円)はゲストプライス

ヤクの毛で機織

カーペットを織っているところ

現在も子供は学校へ行く前に仕事

川を渡るポーターの列

渡渉する女性ポーター

竹やぶがある山間の村人

チェットリ族？

異なった部族（36部族）の女性

マガール族？

35Kg を運ぶポーター達

プラスチックダンボールは破れず雨にも強く燃料にもなる

スイスの援助で出来た吊橋を渡る

キャラバン中に見えるマナスル3山

▼マナスル▼P29▼ヒマルチュリ

ポーターへの賃金支払い

一日18ルピー(306円)

支払っているそばからナイケ(世話役)はピンハネ

チャパティをつくるコック

三点に石を置けば釜戸ができる

キャラバン中の食事風景

日本から持参するカレールーは最高な贅沢！

山間の村の少女

ピュアーな澄んだ瞳が印象的！

キャラバン中、休憩のひと時

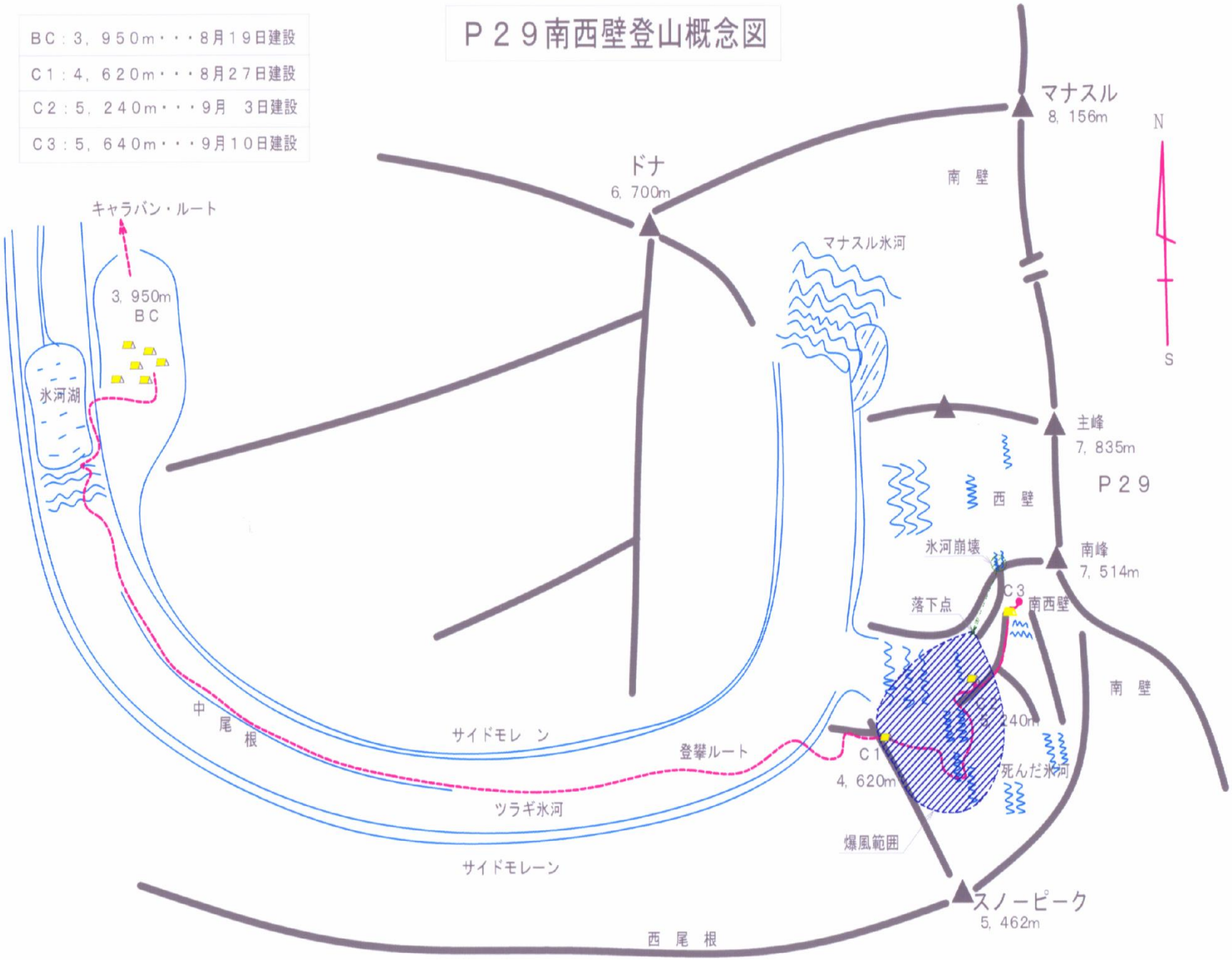
ポーターとの交流も楽しい

丸太で梯子を組み岩場を通過

ポーターの荷物はロープで吊り上げ（2個谷へ転落）

Ｐ２９南西壁登山概念図

ＢＣ：３，９５０ｍ・・・８月１９日建設
Ｃ１：４，６２０ｍ・・・８月２７日建設
Ｃ２：５，２４０ｍ・・・９月　３日建設
Ｃ３：５，６４０ｍ・・・９月１０日建設



お花畑にベースキャンプ設営

3，950m

モンスーンで霧のベースキャンプ

毎日午後から明け方まで雨が降る

BCからC1への荷揚げ

一人約20Kg、C1へは約1．5ｔ（75人分）

ツラギ氷河とP29西壁・南西壁

C1への荷揚げは一日往復16kmのロングコース

ツラギ氷河から見上げる　P29西壁

▼7，835m　高度差≒3，800m

氷河の上に　小川がサラサラ！

日射がなくなると流れも止まる

氷河の末端は氷河湖

水面からの高さ≒50m

夕焼けのP29西壁

▼7，835m

ツラギ氷河から見上げる　マナスル南壁
8，156m（高度差≒4，000m）

「死んだ氷河」と 南西壁

高度差≒2，900m

P29南西壁の全景

南峰＝7，514m　　標高差＝2，800m

氷河はクレバスを迂回しながら登る

氷河のクレバスと荷揚げ

雪に覆われ隠れたクレバスは危険

クレバスの弱点から弱点をつないで
ジグザクに登る

氷河のクレバスを迂回する

固定ロープに通し氷壁を登る

急峻な氷の尾根を登る

▼左側：西壁　　▼右側：南西壁

前の画面を横から見ると

垂直の岩場は　ワイヤー梯子

トップはもちろん自力で岩を登る

足元を見下ろすと！氷河

氷河からの高度差≒1，400m

登りながら、右を見ると！

▼ヒマルチュリ　7，884m

登りながら、左を見ると！

ドナ　6，700m▼　　P29西壁側▼

はるか遠くには・・・

▼８，０００ｍのアンナプルナ連峰

5，000mの雲海の上は快晴！
アンナプルナ連峰に沈む太陽

高度6,000m氷の尾根を登る2隊員

酸素は半分以下で、呼吸が苦しい

氷の尾根にトップロープをのばす

隊長として先頭を登る

大岩壁に向かってトップを登る！

初めて印す足跡に気分は高揚

トップは緊張と高揚が入り混じる！

崩落した西壁氷河の部分▼

6，000m　大岩壁直下

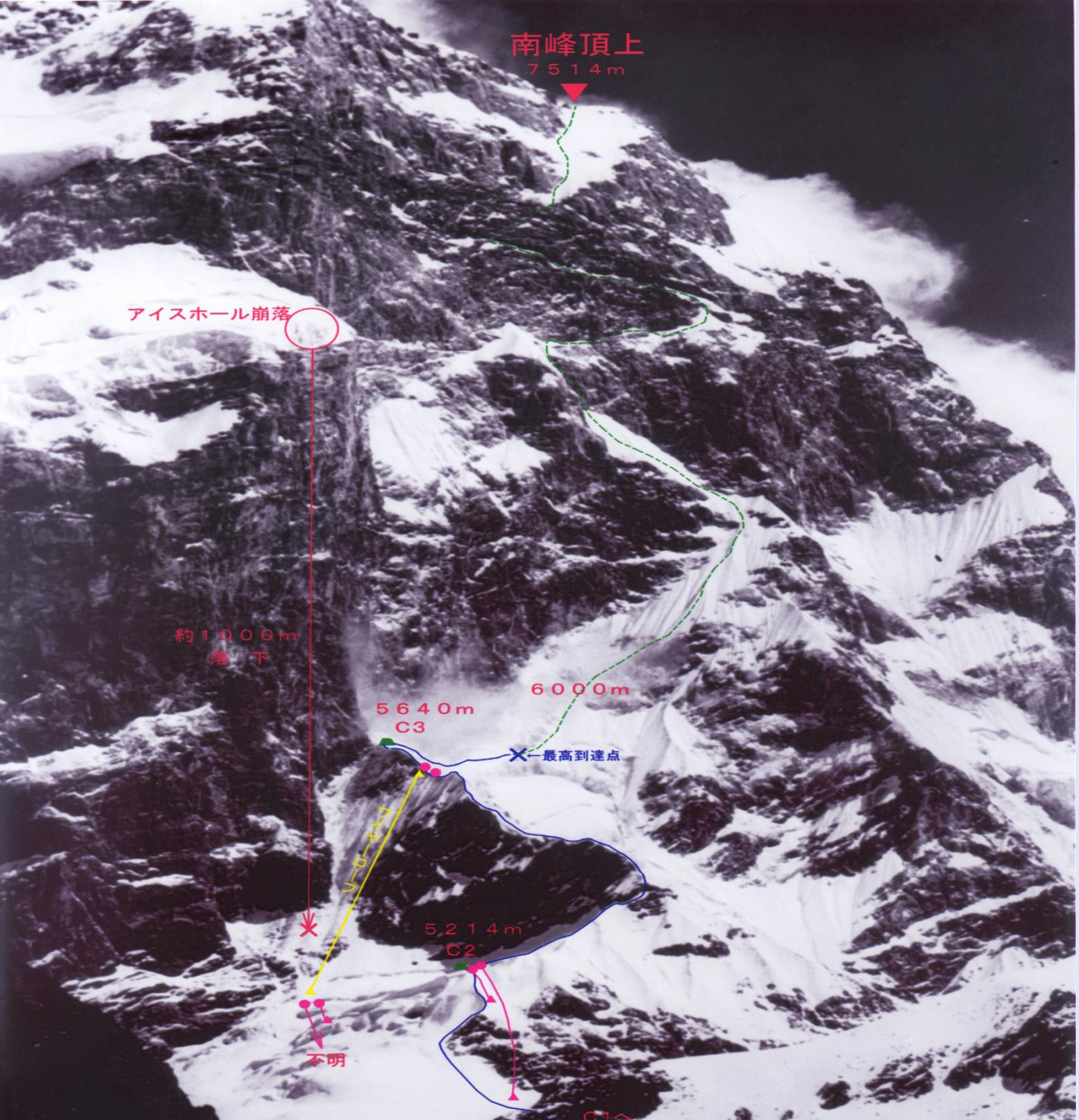
セカンドを登るサーダー（シェルパ頭）

6，000m　南西壁に到達

傾斜60°の岩壁

氷河から2，000m登る

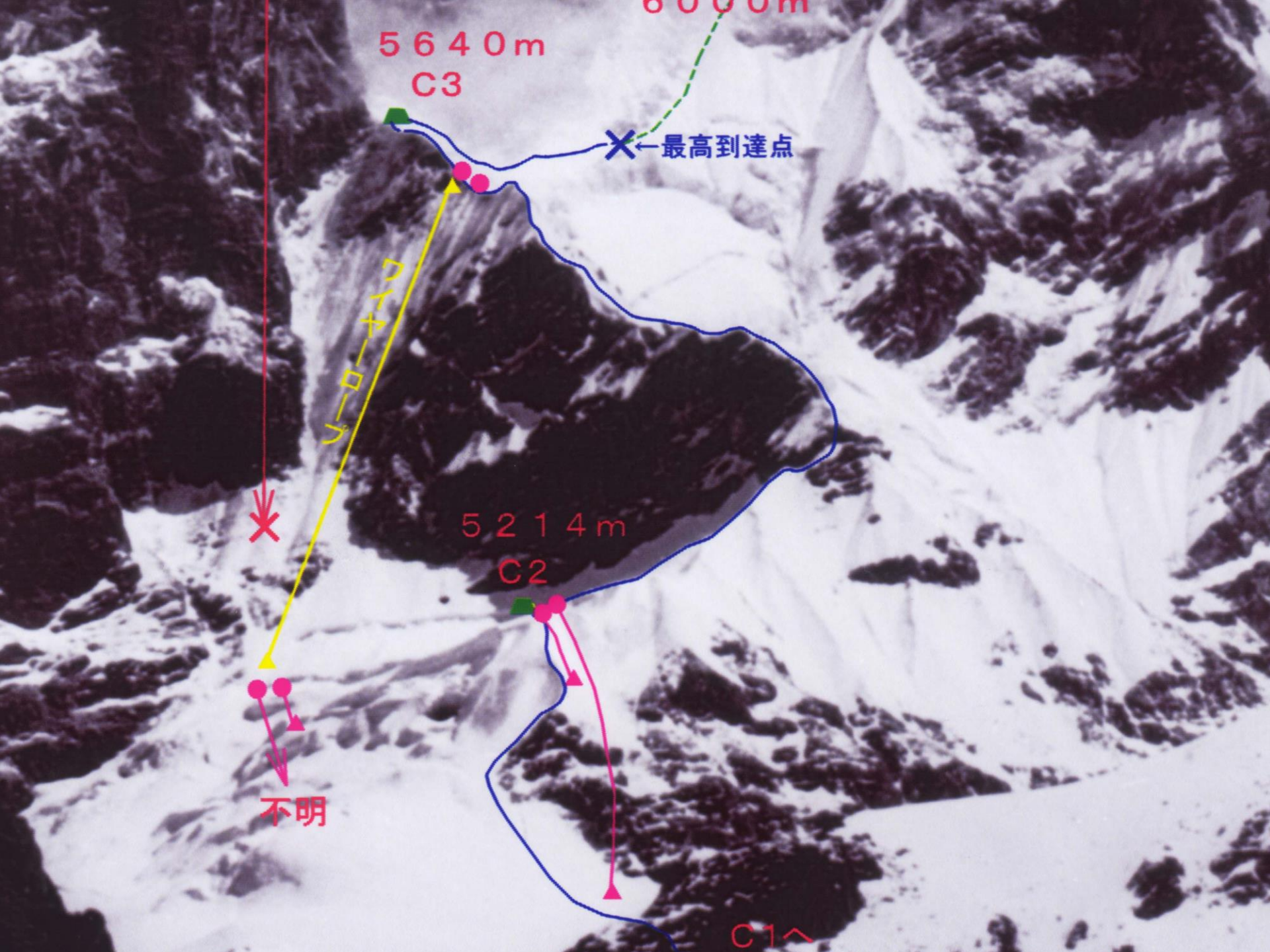
傾斜60°　南西壁の始まり



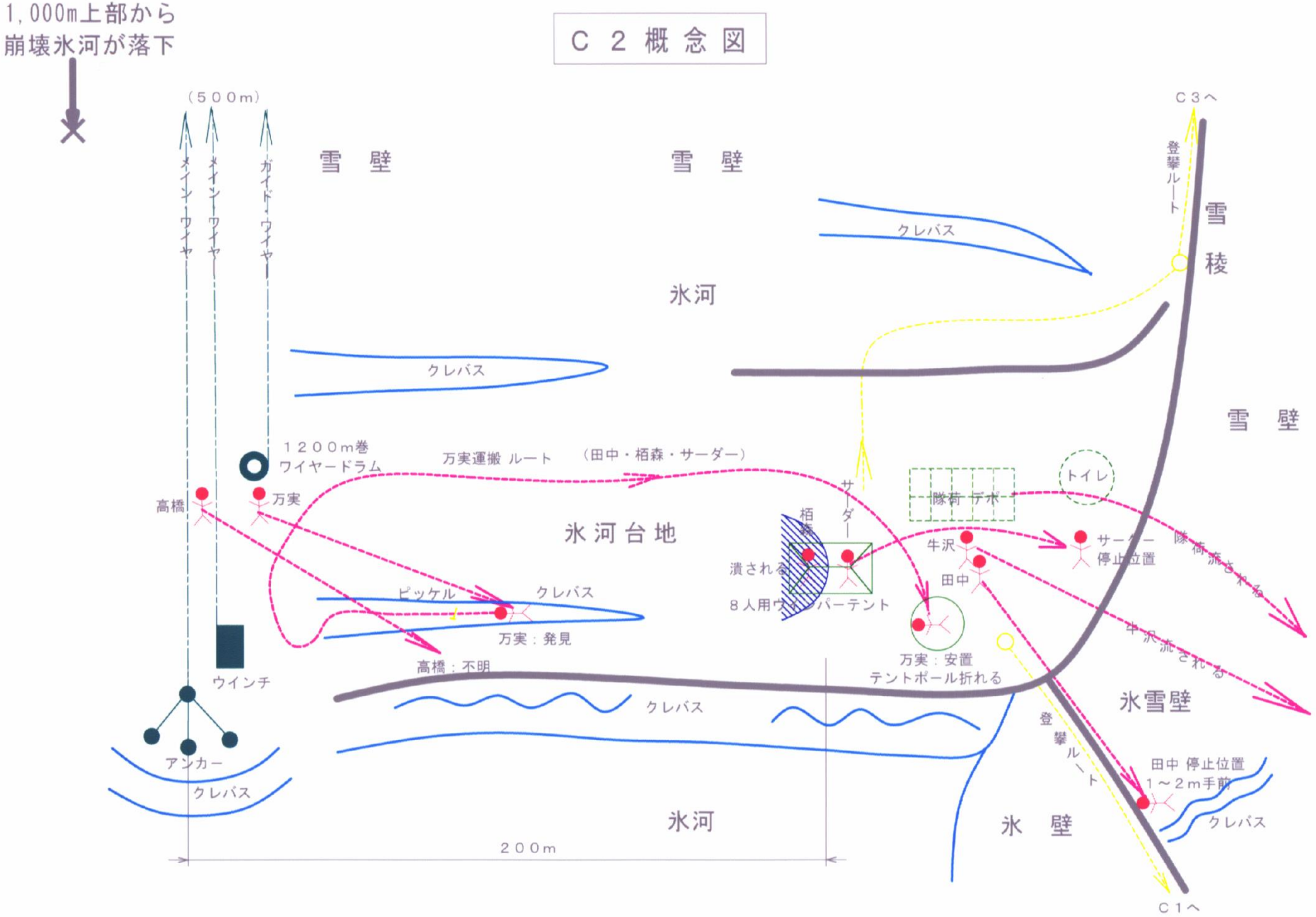
西壁のアイスホールが崩落

3隊員が死亡

内一人は行方不明


6000m
5640m
C3
←最高到達点
フィックスロープ
5214m
C2
不明
C1へ

C 2 概念図


1,000m上部から
崩壊氷河が落下
（500m）
メインワイヤー
メインワイヤー
ガイドワイヤー
雪壁
雪壁
C3へ
登攀ルート
雪稜
クレバス
氷河
クレバス
雪壁
1200m巻
ワイヤードラム
万実運搬 ルート
（田中・栢森・サーダー）
高橋
万実
氷河台地
サーダー
栢森
潰される
8人用ベースキャンパーテント
隊荷デポ
トイレ
牛沢
田中
サーダー
停止位置
隊荷流される
ピッケル
クレバス
万実：発見
高橋：不明
万実：安置
テントポール折れる
牛沢流される
ウインチ
クレバス
氷雪壁
登攀ルート
アンカー
クレバス
田中 停止位置
1～2m手前
クレバス
氷河
氷壁
200m
C1へ

第2キャンプ下台地に2隊員

石積みの埋葬

ベースキャンプに遭難碑

サンテンバ･シェルパ作　＜ラマ教徒＞

ベースキャンプで追悼

隊長カトマンズへ戻り、一時日本へ帰国

ご遺族訪ネ情報とポーターの病気が重なる

ヒマラヤ登山は総合力

外交、輸出入、為替、交渉力、判断力、英語力、登攀力

現代はお金で解決・・・体験が身につかない！

外交交渉

- 外務省（許可申請）、ネパール政府登山規則

輸出入

- 国際船便、インド国内陸送、通関、関税

為替

- 差益、差損 （USドル、ルピー、バーツ、円）
  ブラックマーケット

交渉力

- ネパール政府観光省 （リエゾンオフィサー同行）
- 現地雇用 （シェルパ、ポーター） 、 現地購入

ヒマラヤ登山は外交交渉

昨今のイラク人質、朝鮮拉致問題への参考体験

外務省

・日本隊は外務省を通して登山許可を申請・取得する

・ネパール政府の登山規則による

日本大使館

・ネパール政府と日本外務省との連絡役

ネパール政府観光省

・ネパール国内での登山活動に関連する全ての権限

登山隊

・全ての報告はネパール政府を通しておこなう

・そのため、リエゾン・オフサーが同行する

・報告は全て英語（英語で夢を見る）

外務省と日本大使館の役割

外務省

① 登山許可証申請の窓口

② 日本国内関係者への遭難事故公式連絡

日本大使館

① 登山中における現金の一時預かり(非公式)

② ネパール政府発表の遭難事故報告を本国へ打電(事前の協議事項が無視された)

③ ネパール政府発行の死亡証明書を受け、日本国としての死亡証明書の発行(除籍用)

遭難確率の高いヒマラヤ登山に対して
緊急時への事前対応

外務省・日本大使館

・外交手続きと儀礼程度にとどめる（期待しない）

登山隊の自主対策 （事前準備が不可欠）

・緊急連絡方法の確立（軸となる手配者を特定）

体制、無線、出動・待機のサイン、着陸マークの確認

・緊急輸送手段の確保と医療機関の特定

ヘリコプター、人力、（車）

・緊急用資金の確保と預託

保険加入、フライト費用を預託（手配者へ）

遭難事故後の報告

- ネパール政府　→　英文報告書提出（写真付）
- 日本大使館　→　和文報告書提出
- ご遺族　→　遠征途中で隊長一時帰国
  遺品の引渡し、状況説明
  保険金返却（一人50万円）
  命日に訪問（10年間）
- その他関係者　→　合同追悼会
  手書き報告書配布

20年後の報告 →　「青春のヒマラヤに学ぶ」出版

合同追悼会（東京）

合同追悼会で事故の説明

事故の説明

遭難事故報告と資料展示

支援の友

1996年5月国際公募隊（商業登山）の遭難

1996年5月国際公募隊
難波康子さん登頂後死亡

1996年（平成8年）5月28日　火曜日　39610号　（日刊）

「笑っているね 楽しかったんだね」84歳母
エベレスト登頂目前 難波さん 最後の写真

今月十日、エベレスト（中国名チョモランマ＝八、八四八㍍）に登頂したが、下山途中に遭難した東京都大田区の会社員難波康子さん(四七)のベースキャンプでの様子を写した写真が見つかった。あこがれのエベレストを目の前にして、難波さんはリラックスした様子で笑みを浮かべている。「笑っているね。楽しかったんだね。登頂前の遭難でなかったことが娘にとってせめてもの救いです」。実母の田中嘉世子さん(八四)は写真を見つめ、そう話した。

写真は、難波さんらが所属していた登山隊の外国人医師が撮影したもので、通信社PPSが入手した。難波さんは標高五、三〇〇㍍付近のベースキャンプで、雪と岩をバックにフィルムに納まっている。夫の難波賢一さん(四七)は「心から休暇を楽しんでいるようだ。表情がいいね」。家族に送られたファクスには、ベースキャンプでの生活はとても楽しく、体調も万全だと書かれていたという。

難波さんは、気負わず、淡々と登山のキャリアを重ね、エベレストまでたどり着いた。今回は、世界七大陸最高峰制覇を成し遂げるための最後の山行だった。「康子は、好きだから登っていた。わが子でも止めるわけにはいかなかった」と嘉世子さんはつぶやいた。

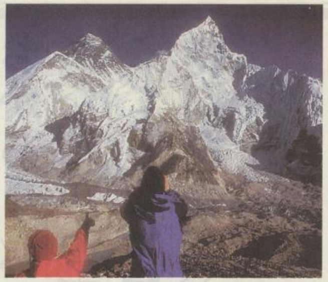
㊤登山隊の医師、キャロライン・マッケンジーさんが撮影したベースキャンプでの難波康子さん ㊦同じくロブ・ホール隊の集合写真。前列右端が難波康子さん＝いずれもPPS

現代ヒマラヤ登山の傾向　（04/3/25朝日新聞）

▼　63才女性医師、登頂後死亡

3　3版　2004年(平成16年)3月24日　水曜日

世界の鼓動



ヒマラヤ高峰を望む有名な展望地カラパタールから、エベレスト（左）とヌプツェの眺め＝01年12月、大蔵喜福さん提供

システム化　装備充実　家族とメールも

大衆化するヒマラヤ　①

五つ星ホテルの前を牛がのったり歩いていく。「ご希望ならあなたもエベレスト（8848㍍）に登らせますよ」。カトマンズ中心街にある「ロールワリン・トレック社」の事務所で、サーダー（ネパール人スタッフの責任者）のナワ・ヨンデン・シェルパさんは、自信たっぷりに言った。

同社は登山隊やトレッキング（山麓歩き）を手配する代理店だ。毎年のように8千㍍峰登山を成功させてきた。高地民族のシェルパに代表される高所ガイドは、ネパールの代理店では最も強力な人材をそろえる。昨春エベレストの最高齢登頂記録（70歳）を作った三浦雄一郎さんの遠征も、ここがサポートした。

□

エベレストは今、かつてのように選ばれた登山家だけの山ではない。80年に中国がチベット側からの登山を解禁。96年春にネパールが入山隊数の制限を撤廃した「規制緩和」もあって、最近では毎年100人以上が登頂する。53年の初登頂から登頂者数がのべ1千人を突破するのに45年かかったが、今春には2千人を超える勢いだ。

こうした大衆化を促したのは、90年代から盛んになった欧米の登山家が組織する営利目的の商業公募隊だ。数百万円を払えば一般登山者でも手が届く。その実務を担当するのがナワさんらが所属する代理店だ。

□

最高峰の登頂経験を持つナワさんは「現在のエベレスト登山はシステム化されている」と言う。

英国隊のヒラリー氏とシェルパのテンジン氏が初登頂した時は、ルートも手探りで高所の影響も不明な部分が多かった。現在はルートなど情報が蓄積され、新素材の衣類や高性能の軽量酸素ボンベの開発などで、厳しい自然にも対応できる。

科学的側面だけではない。「鍵を握るのは酸素と高所ガイド」とナワさんは言う。経験の少ない客にはアタック時の酸素ボンベの数を増やし、引率ガイドも2人つける。

「ガイドの組み合わせは、エベレストに1、2回登った中堅と登頂経験はないが力のある若手。4回以上山頂を踏んだベテランは、慣れが出てきて『なんとしても登頂させる』という意欲が薄くなるから」

ネパール人ガイドが危険個所に固定ロープを張る。上部キャンプのテントや食料、酸素ボンベなどを荷上げ。隊員はロープに沿って上部キャンプに向かう。疲労をためないよう、荷物は最小限に抑えられている。

ベースキャンプではインターネットを使って気象情報を入手し、故郷の家族とメールのやりとりもできる。専属コックがレストラン並みの料理を作り、シャワーテントを備える隊さえある。

かつては冒険の代名詞でもあったヒマラヤ登山は急速な大衆化が進む。死と隣り合わせの危険も伴う世界の変化を追う。

（この連載は近藤幸夫が担当します）

商業公募隊　一般から隊員を募集し、プロガイドが引率するツアー登山隊。最近ではエベレストの登山隊の大半を占める。ヒマラヤ以外にもキリマンジャロやアコンカグアなどの大陸最高峰ツアーも人気を集める。山岳連盟などが会員から募集するツアーは組織内公募隊と言われる。

3版　2004年(平成16年)3月25日　木曜日

チョーオユーに登頂して喜ぶ公募隊の参加者。右端が近藤さん、右から2人目が大田さん、左から2人目が高橋さん。後方左がエベレスト＝02年9月30日、近藤さん提供

商業ツアー　山の素人「究極の夢」求め

大衆化するヒマラヤ　②

死亡

参加費は1人615万円、期間50日。究極の「登山ツアー」が4月14日、日本を出発する。目的地は世界最高峰エベレスト（8848㍍）。中国側から挑戦する。

企画したのは、山岳ツアーを手がける「アドベンチャーガイズ」（本社・東京）。設立6年目で、すでに世界第6位の高峰チョーオユー（8201㍍）、南極大陸最高峰のビンソンマシフ（4897㍍）などのツアー登山を成功させている。エベレストは初の試みだ。

同社代表の近藤謙司さん(41)は国際山岳ガイド連盟認定ガイド。チョーオユーの無酸素登頂経験を持つ登山家だ。「チョーオユーツアー成功後、客の中から7大陸最高峰登頂者を出したいと思った。今回はそのためのステップ」と話す。

今回のツアーには40～60代の男性4人、女性2人の計6人が参加する。職業は自営業や医師など。全員が同社のツアー経験者で、8千㍍峰登頂の実績を持つ。

□　□

欧米の登山家たちは90年代から世界最高峰に商業公募隊を繰り出しているが、日本で本格的な公募隊はほとんどない。

近藤さんは「欧米に比べて、日本人は自己責任の意識が薄い。登頂出来なかったり、遭難が起きたりした場合にトラブルになる恐れが大きい」と説明する。

登頂者が増えたとはいえ、エベレストの自然条件が変わったわけではない。山頂の酸素濃度は平地の3分の1。悪天になれば、ベテランでも遭難の恐れは高い。ツアーを手がけるには、リスクが大きすぎる山だ。日本人の意識も変わったのか。

今回参加する広島県福山市の内科医、大田祥子さん(63)は本格的な雪山経験はまだ2年程度だが、02年春に6千㍍峰を登り、その秋に同社のツアーでチョーオユーに登頂。今年1月には、南極大陸最高峰に登った。

25歳で結婚。32歳で医院を開業した。息子3人の子育てと仕事の両立で「産休以外ほとんど休みはなかった」と言う。

「私の青春は40歳から」と始めた登山の行き着いた先がエベレストだ。頂上直下で右肩を脱臼しながら、近藤さんのガイドで登頂したチョーオユー山頂から、ひときわ大きく見えたエベレスト。「年齢的に最後のチャンス。自分のために自分の限界に挑戦したい」

□　□

東京・府中の自営業、高橋和夫さん(47)も近藤さんのガイドでチョーオユー、ビンソンマシフに登った。今回参加を決めたのは「日本初の本格的なエベレスト公募隊を企画した近藤さんの思いに心が動いた」という。

市民ランナーとして昨年まで19回連続でホノルル・マラソンに出場。99年は自己ベストの2時間49分28秒で47位に入った。「心肺機能では登山家に負けないが、山は素人。より困難なものへの挑戦という登山の本質とは違うけど、最高峰の頂に立ちたいという好奇心を満たしてくれる」。挑戦する山が高くなるにつれて値段も上がるが、「質が違うサービスになるから、それも当然」。

高橋さんはすでにアフリカ大陸最高峰のキリマンジャロも登っており、エベレスト登山後、6月に北米大陸最高峰マッキンリーに旅立つ。

3版　2004年(平成16年)3月26日　金曜日

チュルー峰に登頂した翌日、テントの外で昼食をとる矢部さん。1人でもたっぷりと＝1月19日（近藤和美さん撮影）

経済効果　負担減が招いた　客と外貨

大衆化するヒマラヤ　③

ネパール中部にある6千㍍級のチュルー峰に1月中旬、登った。

きっかけはその2週間前にさかのぼる。滞在していたカトマンズのホテルに、登山家の近藤和美さん(62)がきた。「同じ山へ登りませんか」という誘いだった。

近藤さんは日本勤労者山岳連盟が主催する「高所登山学校」の隊長だ。5人以上の参加者で実施する予定だったが、応募は新潟市の矢部千鶴子さん(27)1人だけ。「どうしても登りたい」と懇願され、2人だけの隊を組織した。

登山料などを含む登山ツアーの費用約60万円は、矢部さんが支払う。近藤さんは「負担を少しでも減らしてあげたい」と言う。登山料は4人までなら350㌦。友人と2人で別の6千㍍峰を登る予定を変更。近藤さんの登山許可申請書に、私たちの名前とパスポート番号を加えてもらった。

□　□

エベレストを始めとする高峰に一般登山者でも登頂可能にした大衆化を支えるのはネパール側の政策も大きい。8千㍍級の前提となる5千～6千㍍級登山に誘う「安く、手軽に」がコンセプトだ。

開放されているヒマラヤ326座のうち、5千～6千㍍級の33座はNMA峰と呼ばれる。ネパール山岳協会（NMA）が、350～500㌦で登山許可証を発行している。

8千㍍級が数百万円、2カ月の日程を必要とするのに比べ、NMA峰は登山期間が2、3週間で済むから費用が安くつく。一方で、ベテラン登山家でも難しい山も含まれており、幅広いニーズに応えることができる。

同じ高さでもNMA峰以外の山は、登山料が1千～2千㌦になる。即日でも許可証が発行されるNMA峰と違い、手続きも2週間以上はかかる。観光省で面接を受けなければならず、煩雑だ。一昨年、各国からNMA峰には688隊、3373人が挑戦した。

チュルー峰に登った矢部さんは欧州ツアー並みの値段で初めてのヒマラヤ登山を満喫した。「いつか、7千㍍峰か8千㍍峰に登りたい」と夢は膨らむ。

ネパールにとって、登山客は70年で556人に過ぎなかったが、ここ10年で急増。00年には11万8780人まで増えている。開発途上国のネパールにとって外貨獲得の大きな手段だ。

□　□

カトマンズのような「都心」でも登山をめぐる経済効果は大きい。中心部のタメル地区は安宿や土産物店が多い。目立つのは登山用具店で、カラフルな衣類や登山靴、寝袋などが店先に並ぶ。レンタル用具を扱う店も増えている。登山家だけでなく、一般旅行者もここで装備をそろえ、トレッキングを楽しむようになったことが大きい。

登山やトレッキングもしない観光客向けに、エベレストなどを間近に望む遊覧飛行が毎日、カトマンズの空港から出ており、人気を集めている。

好調な登山客増にも、不安材料がないわけではない。90年代後半から、共産党毛沢東主義派（マオイスト）がゲリラ活動を続け、山間部でトレッキング客から「通行税」を徴収する行為が目立っている。現地の山岳関係者は「マオイストの影響で、登山隊がネパールを敬遠しなければいいが」と不安がる。

3版　2004年(平成16年)3月27日　土曜日

登山講習会で岩登りにチャレンジする受講生たち＝03年11月26日（近藤幸夫撮影）

登頂請負人　名誉、高給、最高峰で得る

大衆化するヒマラヤ　④

指先に全身の力をこめ、体をずりあげる。岩場の途中で何度も立ち往生したが、女性とは思えないたくましさで約40㍍の難ルートを完登した。

カトマンズ西部の山すそにあるロッククライミング練習場。ネパール山岳協会（NMA）などが主催する登山ガイド講習会が行われている。訪ねた昨年11月の講習には女性を含む若手ガイド11人と、先輩ガイドの講師4人が参加していた。

難しい岩登りをクリアしたドルマ・シェルパさんは21歳。3年前からトレッキングのガイドをしている。故郷はエベレストのふもとの寒村。高地民族のシェルパ族だ。

ネパール人女性の高所ガイドはまだ珍しい。「クライミング・シェルパ（高所ガイド）になってエベレストに登りたい。これはネパール人女性にとって夢の一つ」。農村ではまだまだ女性の社会進出は遅れている。高所ガイドは数少ない機会の一つなのだ。

□　□

79年から毎年NMAが開いてきた高所ガイド用「登山学校」は基礎と上級コースに分かれる。ともに1カ月以上、7千㍍級の高峰に囲まれたヒマラヤ山中で合宿する。

ヒマラヤ登山は、シェルパに代表されるネパール人高所ガイドやポーターが支えてきた。かつては、雇われた遠征隊に手取り足取り登山技術を教えてもらっていた。ヒマラヤの大衆化が進む中で登山学校の人気は高い。

ドルマさんは、38人が参加した上級コースで合格者21人（女性3人）に入った。ネパール、モンゴル、韓国、イランの女性合同隊で昨秋、ニレカ峰（6159㍍）に登頂。エベレストへの道を着々と歩んでいる。

ネパールの有名人をたずねると、「アパ・シェルパ」の名前を答える人が多い。44歳でエベレストに13回登頂。今春、自らの最多記録を塗り替える14回目に挑む高所ガイドだ。カトマンズ市内の銀行には、エベレストを背景にしたアパさんの大きなポスターが飾られている。日本でいえばプロ野球やサッカーのトップ選手のような存在だ。

最高峰の登頂回数が多いガイドは給料も高い。アパさんは「今までだれにも話していない」と、報酬の質問をかわした。エベレストに登頂すれば、収入は2千～3千㌦と言われる。「アパの場合はひとけた違う」とみる山岳関係者もいる。

□　□

ネパールで大卒公務員（40歳）の年収は1200㌦前後。年に1回の登山で倍近く稼ぐ高所ガイドは高額所得者だ。

昨年12月にエベレストのふもとのタモ村で、伝説のシェルパに会った。アン・リタ・シェルパさん(55)は最高峰に10回登頂し、一度も酸素ボンベの助けを借りなかった。「私は高所ガイド。お客さんのための酸素を吸うわけにはいかない」。誇らしげだった。

長男と次男は高所ガイドになり、2人ともすでにエベレストに登っている。「私は生活手段のために山を選び、全うするだけで精いっぱいだった。息子たちには登山のだいご味も味わってもらいたい」。そう言って、うまそうに地酒のロキシー（蒸留酒）を飲んだ。

なぜ山へ行くのか？

It's there → そこに山があるから

ジョージ・マロリー

私は

「青春の情熱」

そして青春とは！

- 抑えがたき心の衝動がエネルギー
- 失敗の中から、成功に導く方法を学ぶ
- 「何のために」という目的意識で振り返る（哲学）

↑

初めての体験は苦しい
繰り返すことにより慣れる
継続は自信となる

第 ２ 部

ヒマラヤに学び → 今も心は青春

知の冒険・心への探求

＜哲学的アプローチ＞

今も心は青春！

ヒマラヤに学ぶ知の冒険と心への探求

32才 ： 設計事務所を独立自営

40才 ： 第一回建築設備士試験合格　第1号

- 受験資格　～　大卒8年（高卒12年）以上の専門実務経験　～　合格率＝13．8%

45才 ： ㈱システム・デザイン設立

- 栄区役所、金沢シーサイドライン車両基地、神奈川県立歴史博物館、三ツ沢公園球技場、金沢スポーツセンター、etc

49才 ： 3男を亡くす　～　そして「環境デザイン」を提唱

- 障害をもって生まれてきた息子（萌）との永遠な別れ
- 「環境デザイン」：　21世紀の環境（人−文明−文化）との関わり方

55才 ： 出版　：「青春のヒマラヤに学ぶ」　文芸社

- 遭難20年目　～　隊長としての責任

56才 ： ベンチャー企業立上げ　～　㈱環境照明

- 特許出願2件　～　白色発行ダイオード照明器具

57才 ： 出版　：「頂のかなたに」　日本文学館

- もう戦争の時代じゃない　～　ブッシュ大統領のイラク戦争に反対

日本山岳文化学会論文発表　：　山岳文化環境（試論）

58才 ： *山手学院土曜講座←新たな試み（次なる世代へのメッセージ）*

エヴェレストから展望する

２１世紀の人類は！

- **絶対者の不在　：　神の不在**

  人間の不完全さを情報が暴露する(特に映像ﾒﾃﾞｨｱ)
  一つの宗教で人類を統一できない現実（文明の衝突）

- **新たな思想　：　環境社会思想**

  人類の欲望は環境との調和が求められている
  それは多様な価値(文化）を認めた共存共生社会

- **住み分けと移動の自由：垂直空間への拡張**

  市民単位の生活空間を情報と物流が結ぶ
  宇宙の中へ居住空間の拡大

(x,y,z)　の視点

(x,y)　の視点→水平思考　(2次元)平地の車社会からの視点
(x,y,z)の視点→水平思考＋垂直思考(3次元)高所からの視点

Z 軸の視点 ⇒ 山岳垂直思考 ⇒ かつて人類は神の啓示を聞いた

垂直の限界点 ⇒ エヴェレスト(1953登頂)

人類が足元にした地上の神(エヴェレスト)のかなたに！
さらに宇宙からみおろした地表に！
果たして何が見えるか？

人間の心　の　多様さ　と　たわいなさ！

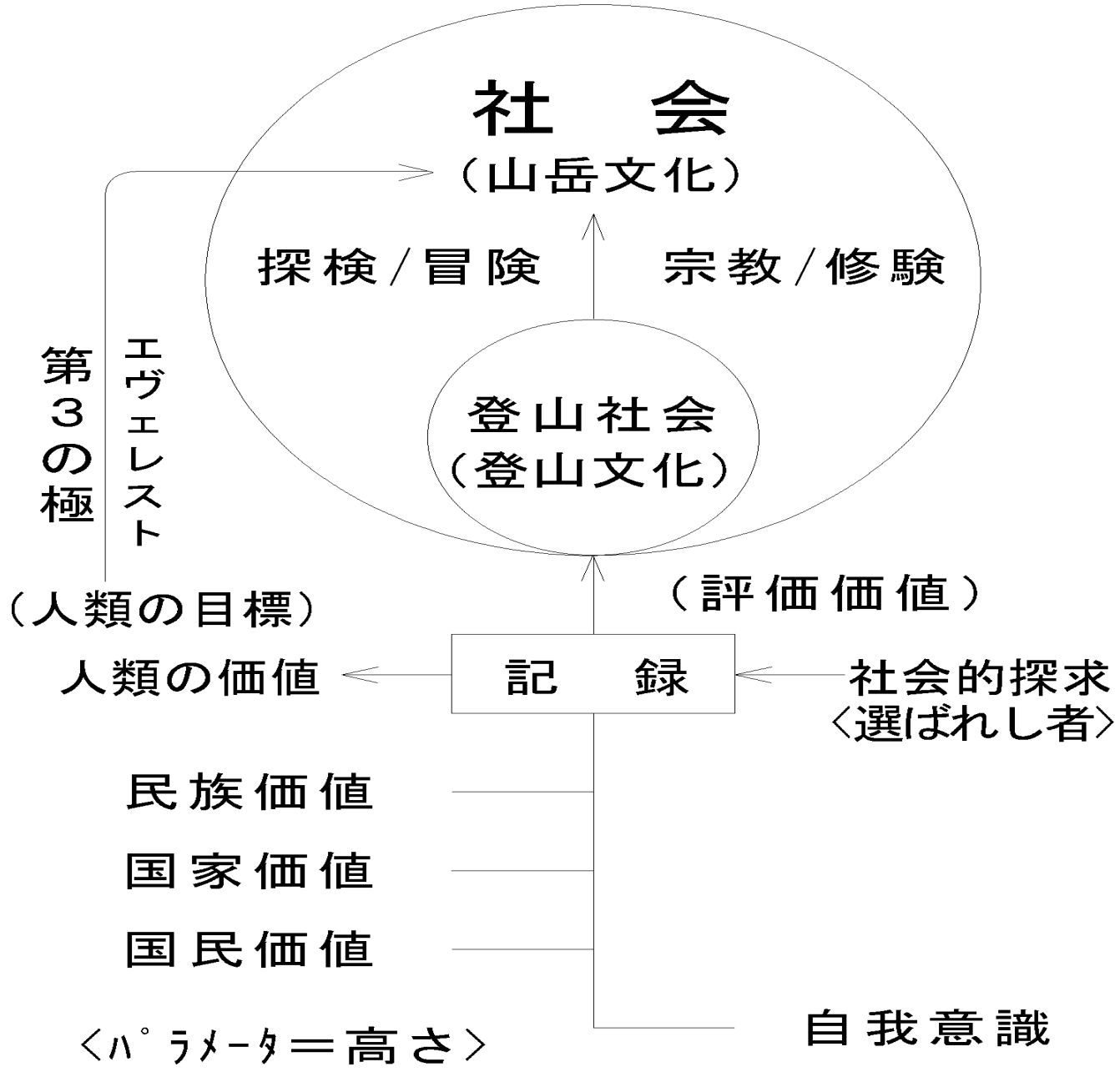
相補性原理：人間は完全でないから補い合いましょう(調和)

２１世紀の人間社会は！

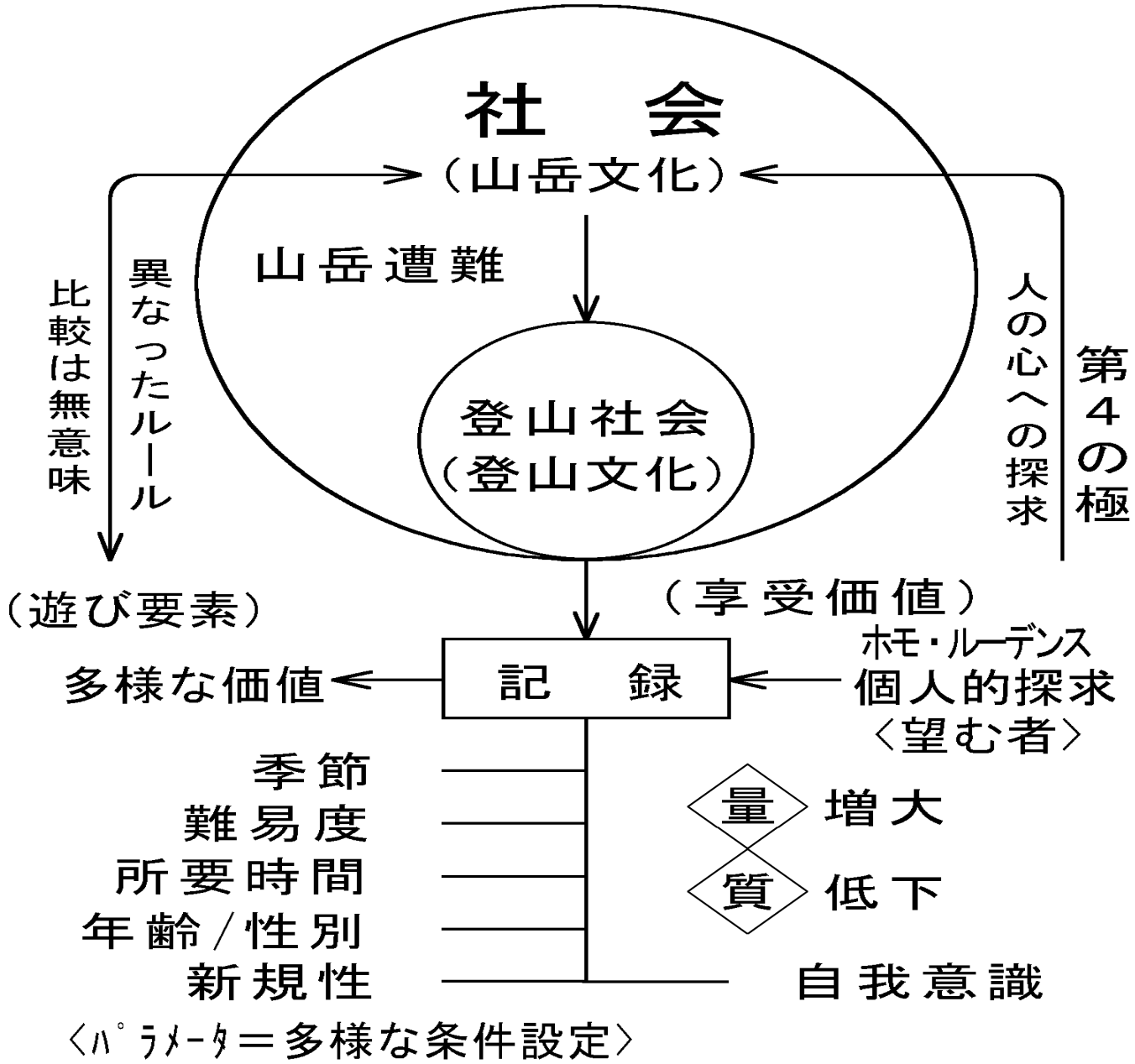
地球と宇宙環境の中で
多様な共存共生と住み分けの時代

相対的(x,y)原理　（優勝劣敗）選抜
（アインシュタイン）相対性原理から
↓
相補的(x,y,z)原理（不完全さを補う）補完
（エーリッヒ・フロム）愛の哲学へ

エヴェレスト登頂以前の登山文化



エヴェレスト登頂以後の登山文化



登山者資質の構造

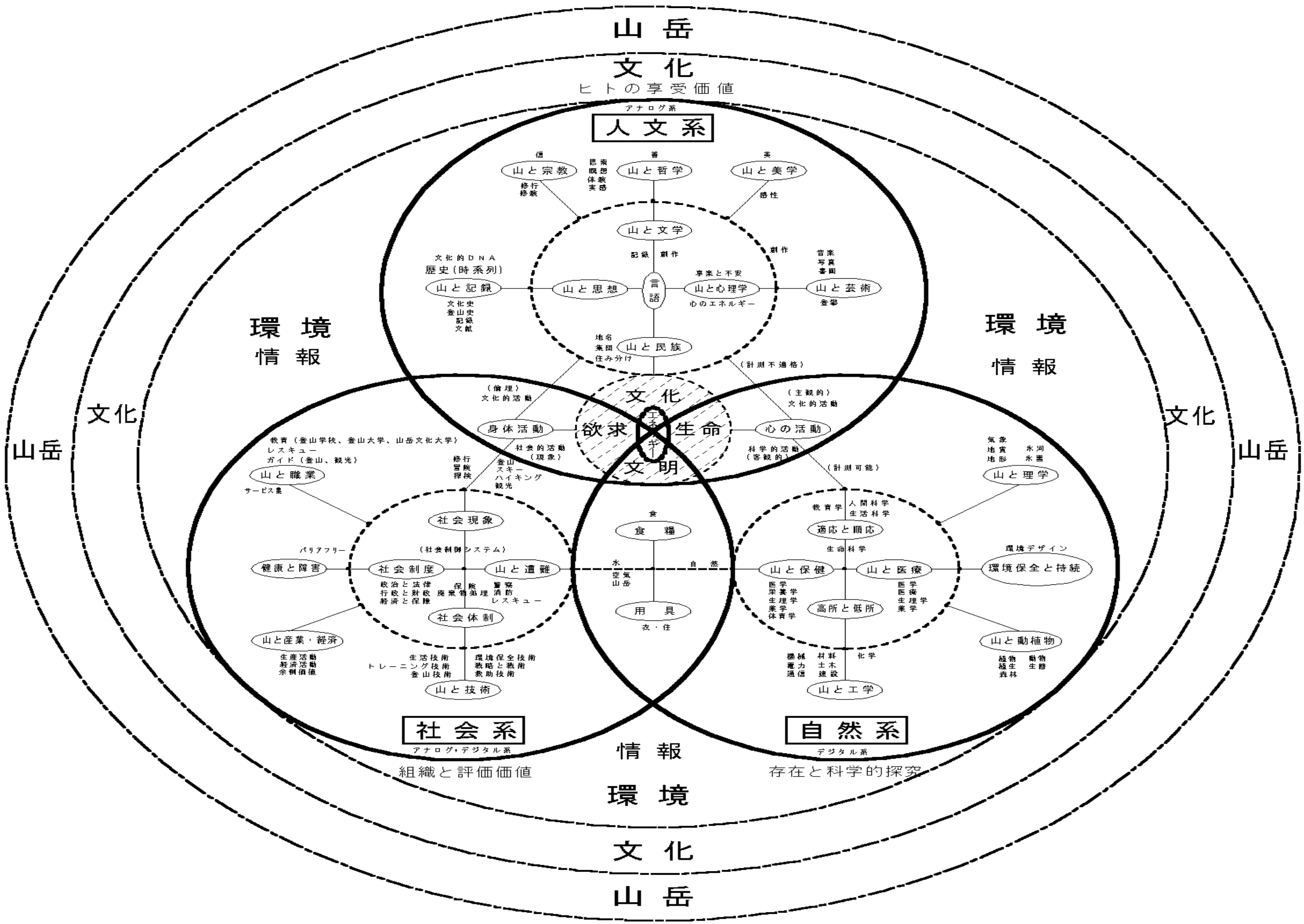
（田中文夫　1973）

必要			要求	欲望	類型	記号	目的分類	呼称
即自欲求・登山者	人間的諸能力の自立展開・文化的欲求	認識的	認識的諸能力の自立展開（知的欲求）	学問（知的遊び）	Ⅱ 未知探求	①	知的冒険～学習	学問
							体験的冒険～知覚	探検
		審美的	感覚的諸能力の自立展開（美的欲求）	芸術（感覚的遊び）	Ⅲ 自然沈潜 Ⅳ 余暇利用	②	美の観賞（主客分離） 自我の確立（主客分離）	観光（感覚）
							美への同化（一体化）	観光レジャー
							美の複写（コピー） 美の保存（占有）	芸術
		思索的	総括的意志能力の自立展開（主体性欲求）	思想「生と死」（特定制約からの自由）	Ⅰ 精神修養 Ⅲ 自然沈潜	③	自然法則支配の無視～抵抗（自然疎外） アルピニズム～修養	アルピニスト
							自然法則支配への没入～自己の無視（自己疎外）	宗教
							一時の限られた虚構～創作（思索）	文学、詩
							自然観察～自己確認（意志）	哲学、思想
		スポーツ	身体的諸能力の自立展開（活動欲求）	スポーツ（身体的遊び）	Ⅴ 身体鍛錬	④	自然との力比べ（空間）（自己解放の感覚）	スポーツ
							身体能力の段階的向上（時間） 生体（健康）の維持（感覚）～楽しさ	レジャースポーツ
対自欲求・登山家	実存的欲求	存在 労働	存在を媒介とした肯定的自己確認（創造）	創造の選択			美の創造（自己の物理的表現） 状況（様式の美的表現）	芸術様式 文芸様式 登山様式 労働様式
		他者 交流	他者を媒介とする肯定的自己確認（愛）	愛の選択			愛の創造（仲間との関係） 他者媒介～自己愛 目的（自己自身との関係） 自己媒介～自己愛（意味）	ガイド業 パーティ登山 （組織登山）
		自己 自己意識	自己自身を媒介とする肯定的自己確認（統合）	生き甲斐の選択			生の創造（生き甲斐として、空間、実践 時間、物質的実践）	登山、芸術家 文芸家、学者 宗教家 スポーツマン

たとえば！

登山者の多様性とは

［図－５］山岳文化環境


山岳
文化
ヒトの享受価値
アナログ系
人文系
信
山と宗教
修行
修験
善
山と哲学
思索
瞑想
体験
実感
美
山と美学
感性
山と文学
記録
創作
文化的ＤＮＡ
歴史（時系列）
山と記録
文化史
登山史
記録
文献
山と思想
言語
享楽と不安
山と心理学
心のエネルギー
音楽
写真
書画
山と芸術
登攀
地名
集団
住み分け
山と民族
（計測不適格）
（倫理）
文化的活動
（主観的）
文化的活動
文化
欲求
エネルギー
生命
文明
身体活動
社会的活動
（現象）
心の活動
科学的活動
（客観的）
（計測可能）
教育（登山学校、登山大学、山岳文化大学）
レスキュー
ガイド（登山、観光）
山と職業
サービス業
修行
冒険
探検
登山
スキー
ハイキング
観光
社会現象
（社会制御システム）
バリアフリー
健康と障害
社会制度
山と遭難
政治と法律
行政と財政
経済と保障
保険
廃棄物処理
警察
消防
レスキュー
社会体制
山と産業・経済
生産活動
経済活動
余暇価値
生活技術
トレーニング技術
登山技術
環境保全技術
戦略と戦術
救助技術
山と技術
食
食糧
水
空気
山岳
自然
用具
衣・住
気象
地質
地形
氷河
水害
山と理学
教育学
人間科学
生活科学
適応と順応
生命科学
環境デザイン
環境保全と持続
山と保健
山と医療
医学
栄養学
生理学
薬学
体育学
医学
医療
生理学
薬学
高所と低所
山と動植物
植物
生態
森林
動物
生態
機械
電力
通信
材料
土木
建設
化学
山と工学
環境
情報
環境
情報
文化
山岳
文化
山岳
社会系
アナログ＋デジタル系
組織と評価価値
情報
自然系
デジタル系
存在と科学的探究
環境
文化
山岳

冒険・探検とは？

冒険 ＝ 危険(リスク)を冒す行為

探検 ＝ 未知な領域に踏み込み探求する行為

冒険・探検 → 自己責任が伴う

20世紀までの冒険・探検

＜地球上＞

第1の極　：　北極　（1909年）ビアリ　（アメリカ）
第2の極　：　南極　（1911年）アムンゼン　（ノルエー）
第3の極　：　エヴェレスト（1953年）
ヒラリー、テンジン　（イギリス）

＜宇宙＞

第1段階　：　有人衛星　（1961年）ガガーリン　（ソ連）
第2段階　：　月面着陸　（1969年）
アームストロング、オルドリン　（アメリカ）
第3段階　：　スペースシャトル（1981年）コロンビア号
（アメリカ）

２１世紀の冒険・探検

＜地球上＞　　人類から　→　個へ

第4の極　：　ヒトの心の中　→　小宇宙

その他　　：　深海探査、地底探査

＜宇宙＞　　人類として

第1段階　：　有人宇宙ステーション（2000年～）

第2段階　：　月面移住

第3段階　：　有人火星探査

２１世紀の冒険・探検の対象

- 目に見える　→　現象の世界　→　形而下
  - 深海探査、地底探査
  - 人類の共生と住み分けの環境社会
  - 宇宙探査、月面移住

- 目に見えない →　心象の世界　→　形而上
  - ヒトの心（小宇宙）への探求
  - 多様な価値の共存文化

自己責任

＜ 責任には限界がある ＞

負 える 責任（限 界） ： 相対的限界（復元可能）

・下記以外の全て

負えない責任（限界） ： 絶対的限界（復元不可能）

・死 ・破壊 ・喪失 ・etc

冒険・探検する時は責任の限界を意識し、
最善（do our best）の対策をとる

もし失敗した時 → ・ 適切な批判には耳を傾ける
・ 不適切な批判は無視する
・ 合理的・論理的に検証し次に生かす

知をもって ・ 心への探求

前の心 → 思考／行動 → 違った心

（古い自分） ＜進化＞ （新しい自分）

心の世界 →
- 唯一つだけの本当の世界などはない
- それぞれの心が,それぞれの心の中で、自分自身の心の世界を進化させてゆく
- 波長の合ったリズムどうしは心地よい
- 本当の心は目に見えない

進化＝文明 ← 非可逆性（元に戻らない）

文化 ← 可逆性（同質性を繰り返す）

心とは何か？

マーヴィン・ミンスキー(MIT教授)→「心の社会」

◎　一定の関係によって統合された様々に異なる知覚の集まりにすぎない

◎　それぞれには心を持たない多数のエージェント（要素）が形成する固体社会

わたしが考える心とは→「欲求と思考と感性の総体」

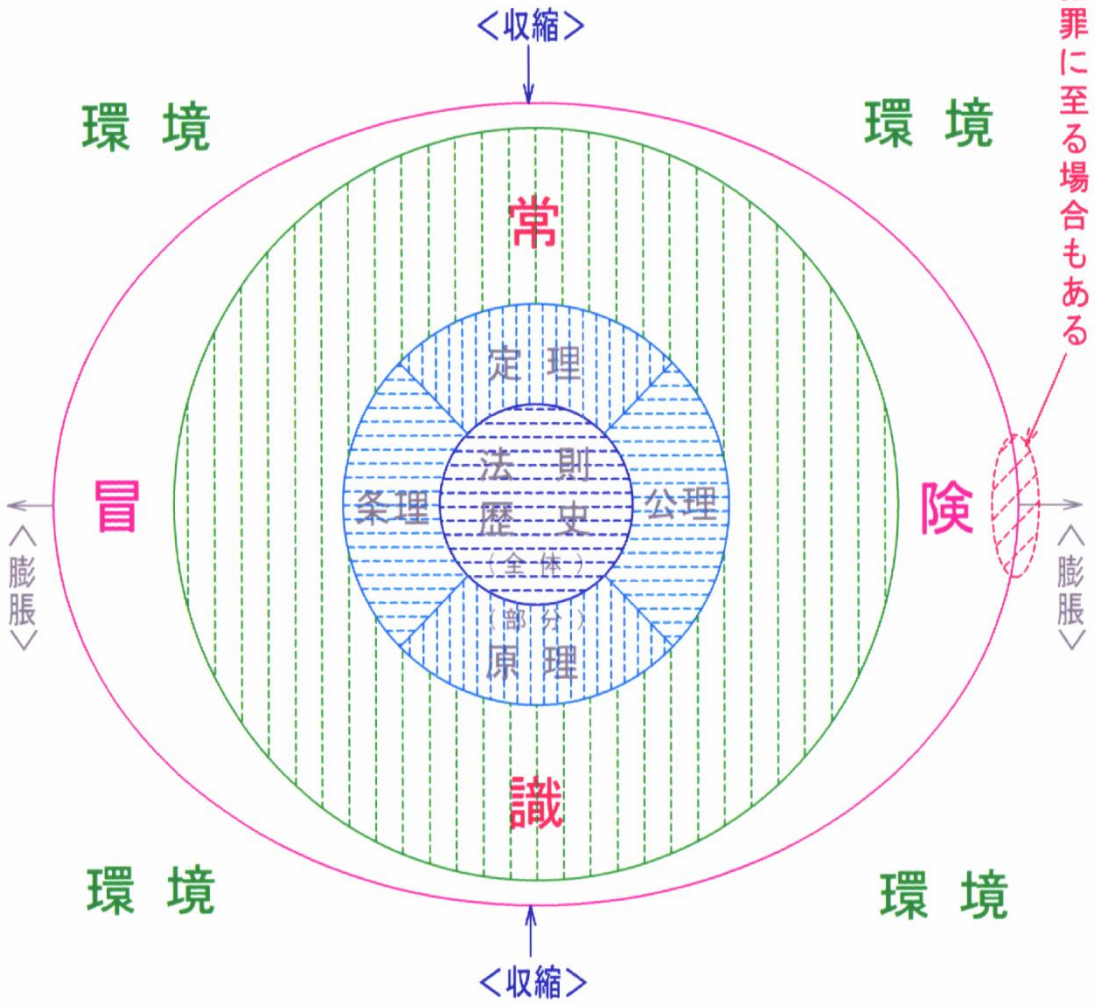
◎　欲求（主観的な本能）　←　見られている自分

◎　思考（客観的な理性）　←　見ている自分

◎　感性（固有な波長・ﾘｽﾞﾑ）←　感じる自分

本当の心は目に見えない

知の冒険



基礎がないと犯罪に至る場合もある

＜ ３ Ｗ １ Ｈ ＞

①W 主体（だれが）

人類（概念）⇒個体（一人ひとり）が

②W 対象（どこで）

常識をはみ出す環境（あらゆる存在）へ

③W 目的（何のために）

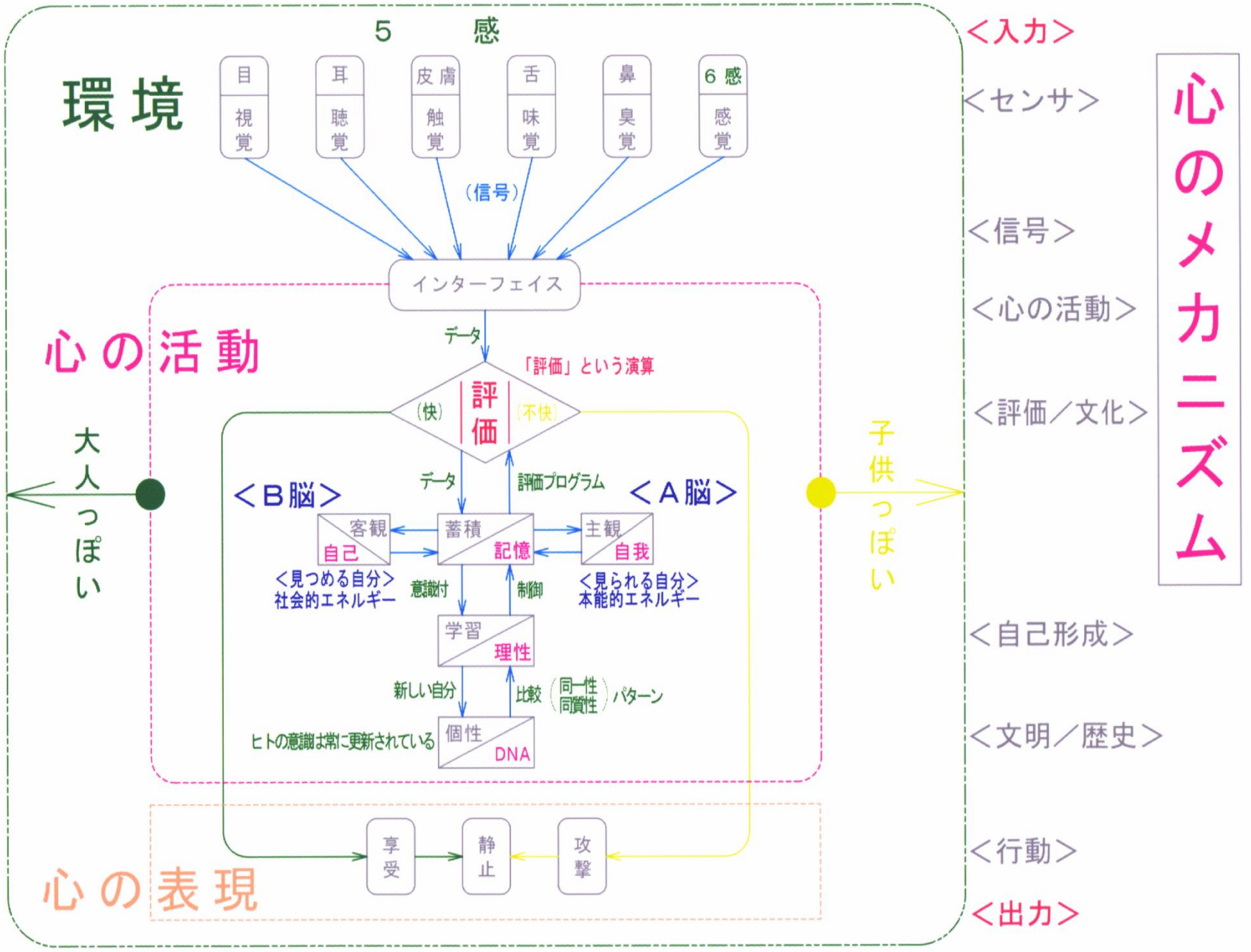
知能がより真実の実体を知ろうとする本能

①H 方法（どうやって）

基礎から演繹（推論）による実証体験

知の冒険の特徴

①真実を知る喜びが実感できる
②人類進化の方向へ拡大、膨張する
③人類自己保存の方向へ収縮する
④自己責任のリスクを負う原則
⑤基礎がないと犯罪誘発の恐れがある


心のメカニズム
<入力>
<センサ>
<信号>
<心の活動>
<評価／文化>
<自己形成>
<文明／歴史>
<行動>
<出力>
環境
5 感
目 視覚
耳 聴覚
皮膚 触覚
舌 味覚
鼻 臭覚
6 感 感覚
（信号）
インターフェイス
心の活動
データ
「評価」という演算
（快）
評価
（不快）
大人っぽい
子供っぽい
<B脳>
<A脳>
データ
評価プログラム
客観 自己
蓄積 記憶
主観 自我
<見つめる自分>
社会的エネルギー
意識付
制御
<見られる自分>
本能的エネルギー
学習 理性
新しい自分
比較
同一性
同質性
パターン
ヒトの意識は常に更新されている
個性 DNA
心の表現
享受
静止
攻撃

心への探求　・　出発点

「これ！」と言って形を示して説明できない

自己への叫び

↓

理性では抑えきれない

↓

感情　　情熱　　欲望等　　「人間のマグマ」

心への探求のパラドックス

◎　心が自分自身を調べることは、科学者が科学するより難しい。（ゲシュタルト心理学）

　つまり、部分が全体を調べ、全体における部分の正しさを証明することは完全には出来ない

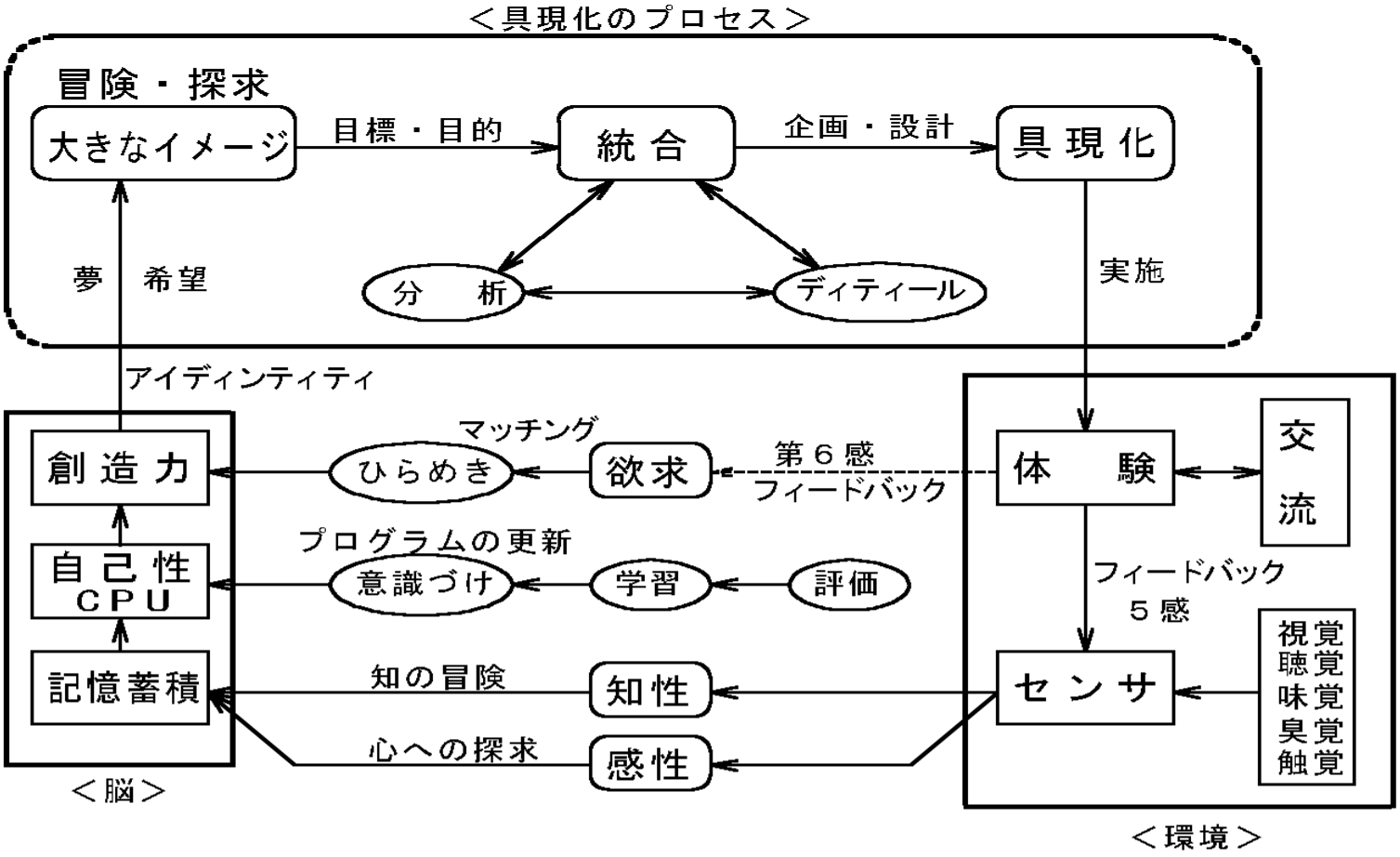
◎　科学者は部分的な正しさは証明できるが、全体の正しさまで証明できない

ヒトの心は心の部分の総和をはるかに超えた存在

ヒトは生命（心も）の探求をやめることができない

（ヒトに組み込まれたDNA）

探求のプロセス



＜エネルギーとコストが伴う＞

わたしの探求例！

◎　登山をとおした環境（自然）との対話から

◎　電気設備設計をとおした環境技術から

学問的探求（知能）と実践（技術）の展開

環 境 デ ザ イ ン（知能）

発光ダイオード照明の開発（技術）

環境とは？

- 環境基本法（日本）　→　定義なし

  定義：「環境への負荷」、「地球環境保全」、「公害」

- 辞書（広辞苑）　→　①めぐり囲む区域　②四周の事物。特に、人間または生物をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うものとして見た外界。自然環境と社会環境とがある。

- 国際環境科学用語集→　environment

環境とは　⇒　対象をとりまく総ての事象

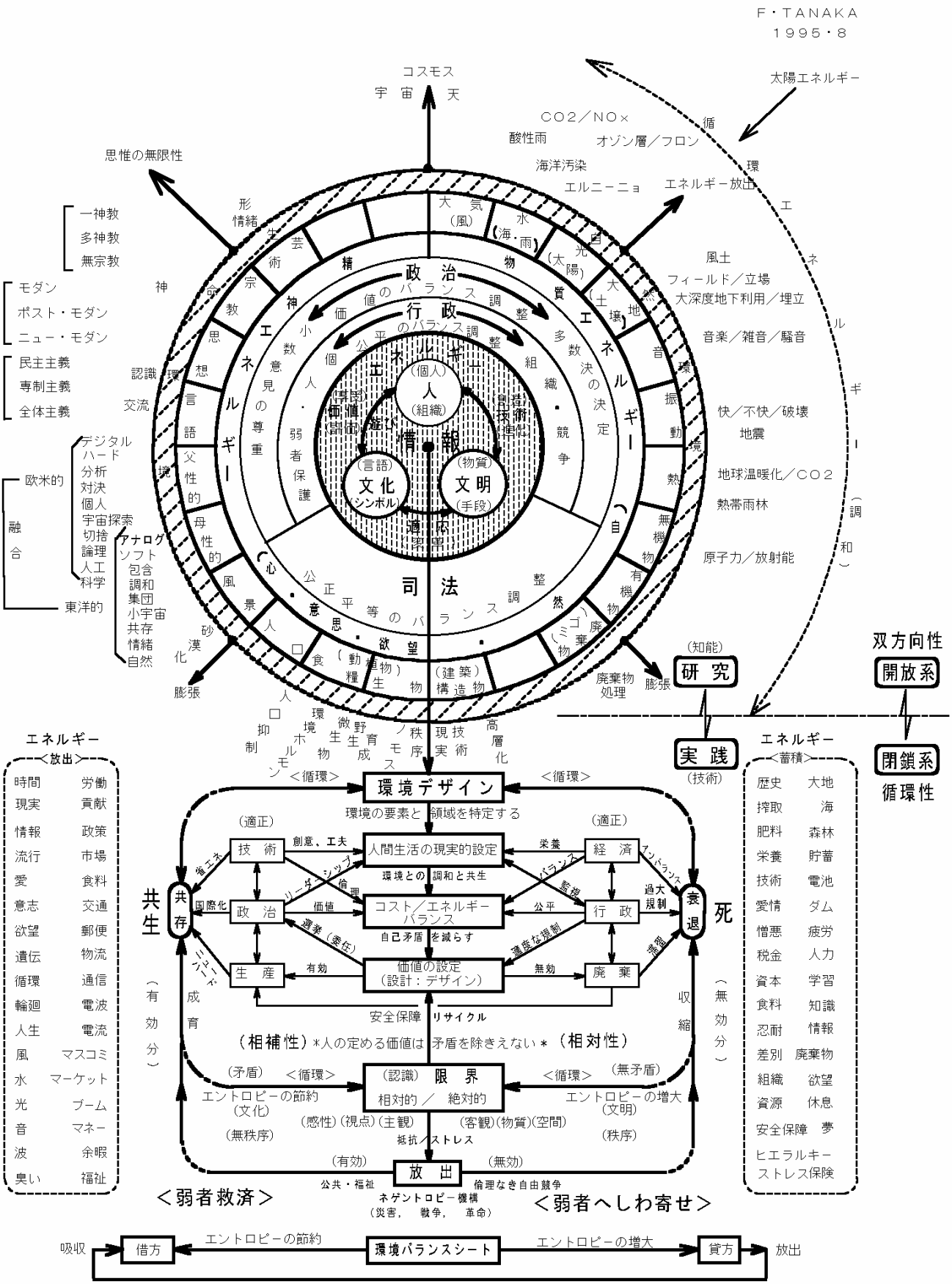
環境デザインの定義

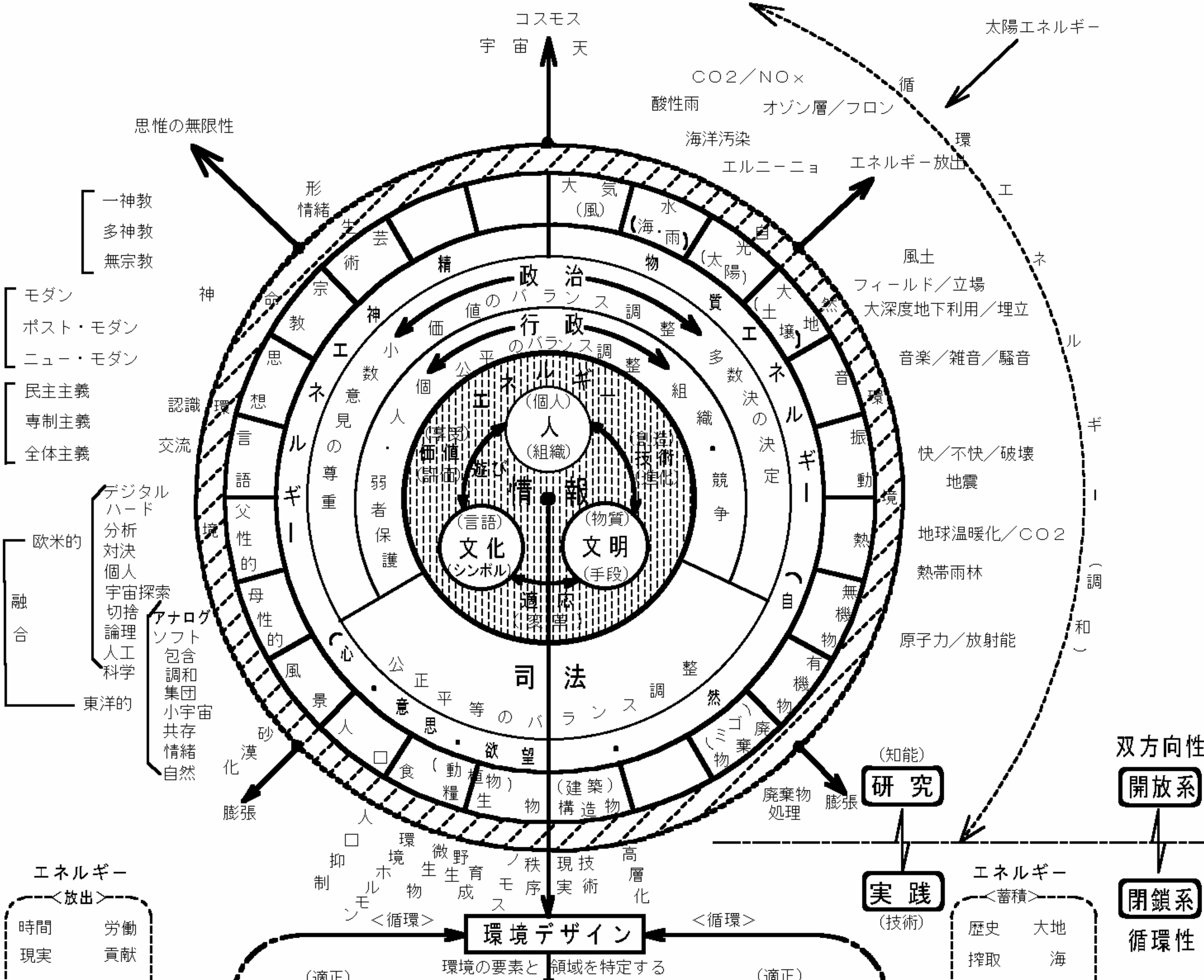
（試み）

（1996．05．28）

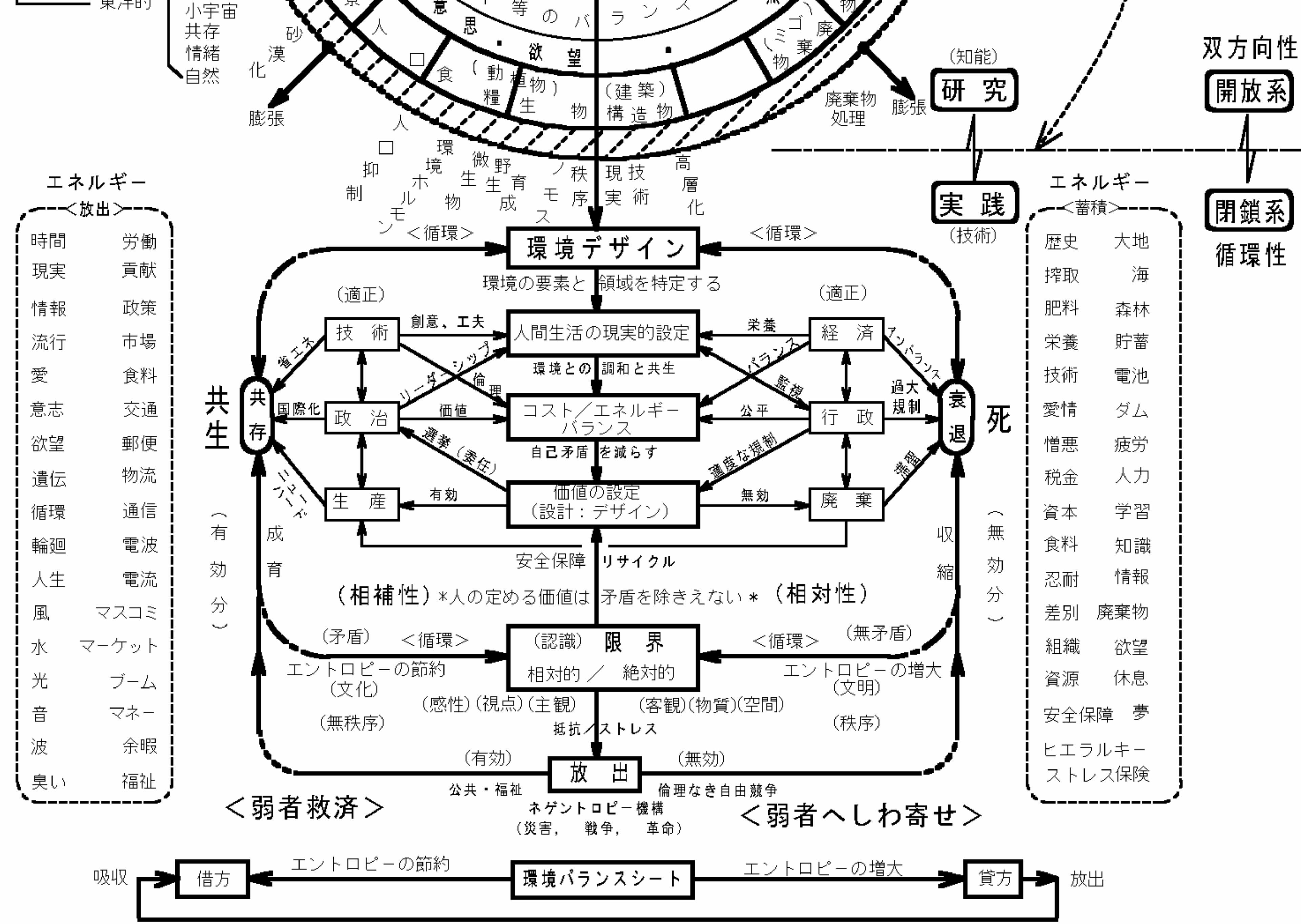
環境デザインとは、ある時限における
環境の諸要素と領域を特定し、
その文化的価値を定める行為

［図－４］環境デザイン・モデル





コスモス
宇宙 天
思惟の無限性
太陽エネルギー
CO2／NOx
酸性雨
オゾン層／フロン
海洋汚染
エルニーニョ
エネルギー放出
循環エネルギー（調和）
一神教
多神教
無宗教
モダン
ポスト・モダン
ニュー・モダン
民主主義
専制主義
全体主義
認識
交流
デジタル
ハード
分析
対決
個人
宇宙探索
切捨
論理
人工
科学
欧米的
融合
東洋的
アナログ
ソフト
包含
調和
集団
小宇宙
共存
情緒
自然
風土
フィールド／立場
大深度地下利用／埋立
音楽／雑音／騒音
快／不快／破壊
地震
地球温暖化／CO2
熱帯雨林
原子力／放射能
大気（風）
水（海・雨）
光（太陽）
大地（土壌）
音
振動
熱
無機物
有機物
廃棄物（ゴミ）
構造物（建築）
生物（動植物）
食糧
人口
風景
母性的
父性的
言語
思想
宗教
芸術
形
情緒
生命
神
精神エネルギー（心）
物質エネルギー（自然）
政治
価値のバランス調整
行政
公平のバランス調整
司法
公正平等のバランス調整
小数意見の尊重
多数決の決定
個人・弱者保護
組織・競争
意思・欲望
エネルギー
人（個人）（組織）
文化（言語）（シンボル）
文明（物質）（手段）
情報
価値（尊厳）（評価）
遊び
技術（創造）（進化）
適応（変革）
環境
砂漠化
膨張
人口抑制
環境ホルモン
微生物
野生育成
ノモス
秩序
現実
技術
高層化
廃棄物処理
(知能)
研究
実践
(技術)
双方向性
開放系
閉鎖系
循環性
エネルギー
<放出>
時間
労働
現実
貢献
エネルギー
<蓄積>
歴史
大地
搾取
海
<循環>
環境デザイン
<循環>
環境の要素と領域を特定する
(適正)
(適正)



小宇宙
共存
情緒
自然
砂漠化
膨張
人口
食糧
(動植物)生物
(建築)構造物
意思
欲望
廃棄物
膨張
廃棄物処理
(知能)
研究
実践
(技術)
双方向性
開放系
閉鎖系
循環性
人口抑制
環境ホルモン
微生物
野生育成
ノモス
秩序
現実
技術
高層化
エネルギー
<放出>
時間 労働
現実 貢献
情報 政策
流行 市場
愛 食料
意志 交通
欲望 郵便
遺伝 物流
循環 通信
輪廻 電波
人生 電流
風 マスコミ
水 マーケット
光 ブーム
音 マネー
波 余暇
臭い 福祉
エネルギー
<蓄積>
歴史 大地
搾取 海
肥料 森林
栄養 貯蓄
技術 電池
愛情 ダム
憎悪 疲労
税金 人力
資本 学習
食料 知識
忍耐 情報
差別 廃棄物
組織 欲望
資源 休息
安全保障 夢
ヒエラルキー
ストレス保険
<循環>
環境デザイン
<循環>
環境の要素と領域を特定する
(適正)
技術
創意、工夫
人間生活の現実的設定
栄養
(適正)
経済
省エネ
リーダーシップ
倫理
環境との調和と共生
バランス
アンバランス
監視
過大規制
共生
共存
国際化
政治
価値
コスト/エネルギーバランス
公平
行政
衰退
死
選挙(委任)
自己矛盾を減らす
適度な規制
淘汰
ニューハード
生産
有効
価値の設定(設計:デザイン)
無効
廃棄
(有効分)
成育
安全保障
リサイクル
収縮
(無効分)
(相補性)*人の定める価値は矛盾を除きえない*(相対性)
(矛盾)
<循環>
(認識)限界
<循環>
(無矛盾)
エントロピーの節約
(文化)
相対的/絶対的
エントロピーの増大
(文明)
(感性)(視点)(主観)
(客観)(物質)(空間)
(無秩序)
抵抗/ストレス
(秩序)
(有効)
放出
(無効)
公共・福祉
倫理なき自由競争
<弱者救済>
ネゲントロピー機構
(災害, 戦争, 革命)
<弱者へしわ寄せ>
吸収
借方
エントロピーの節約
環境バランスシート
エントロピーの増大
貸方
放出

環境デザインの論理式

（試論）

① 論理的環境問題への適応＝

環境容量＞環境負荷

② 環境負荷 ＝ 環境×（文明＋文化）×Σ[人（欲求・制御）]

＝ 環境×作為×Σ（生活設計）

③ 生活設計 ＝ Σ[人×（欲求・制御）]

⇒ 消費を制御する文化の在り方

（人の心の在り方）ライフスタイル

発光ダイオード照明の開発

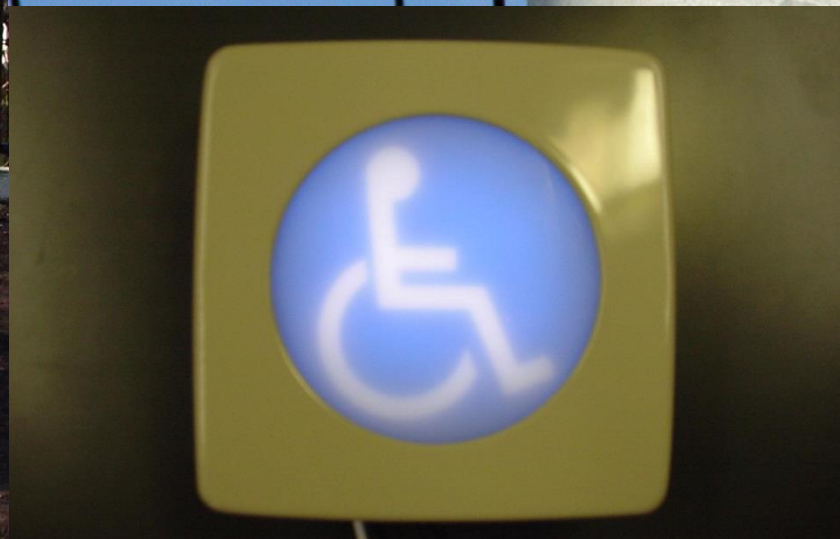
横浜市として始めて設置 （2002．10）

NHKニュースで放映

よこはまテクニカルショウ2003へ出展

実　施　例 - 1

横浜市上飯田地区センター



実　施　例－２

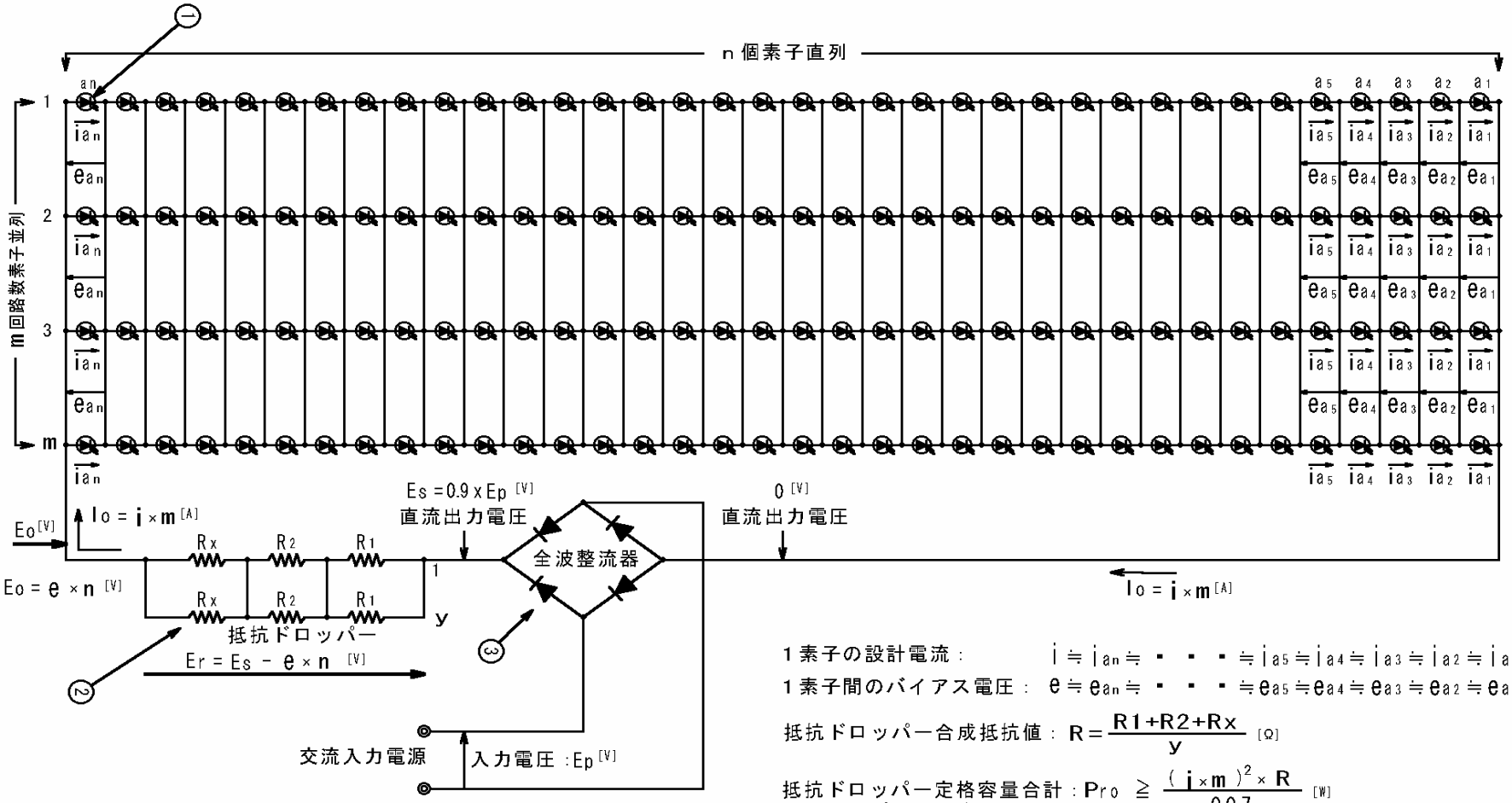
多摩美術大学レクチャーホール外部

実　施　例－３

多摩美術大学レクチャーホール内部

特 許 出 願 （2004. 2）

［ 図１ ］　交流入力電源用ＬＥＤ素子結線条件：ｎ個直列 ｍ回路並列 ┐マトリックス接続



１素子の設計電流：　$i \fallingdotseq i_{an} \fallingdotseq \cdots \fallingdotseq i_{a5} \fallingdotseq i_{a4} \fallingdotseq i_{a3} \fallingdotseq i_{a2} \fallingdotseq i_{a1}$ [A]

１素子間のバイアス電圧：　$e \fallingdotseq e_{an} \fallingdotseq \cdots \fallingdotseq e_{a5} \fallingdotseq e_{a4} \fallingdotseq e_{a3} \fallingdotseq e_{a2} \fallingdotseq e_{a1}$ [V]

抵抗ドロッパー合成抵抗値：$R = \dfrac{R1+R2+Rx}{y}$ [Ω]

抵抗ドロッパー定格容量合計：$Pro \geqq \dfrac{(i \times m)^2 \times R}{0.07}$ [W]
（周囲温度＋２０℃以下）

登山経験からの危機対応例！

◎ 災害における緊急生活技術への適応

衣 → 着のみ着のままの生活ができる
食 → だれでも自炊できる
住 → テント生活やどこでも眠れる

◎ 危機現場からの脱出技術等

下降技術 → ロープ1本で建物を下降できる
登攀技術 → いろいろな所へ登れる

◎ 危機意識の適応訓練がある

生死を賭けた登山経験者ほど危機適応度が高い
リーダー経験は危機管理意識が高い

我が家の危機と喜び

- 障害（水頭症）を持って生まれた3男「萌」
- ヒマラヤ体験は障害児の受容を容易にした
  失って気づく「無意識な存在の偉大さ」
- 発達の遅れとリハビリテイショウンの努力
- 5才7ヶ月で突然な別れ（1995年8月）
- 3男「萌」は家族の心の中にいつもいる

障害で気づく「無意識なヒトの偉大さ」

ヒトはだれでも何らかの障害をもっている

（完全な人間はいない）

失わないと気づかない
ヒトの愚かさ

- 大切なものを失ってきた「青春のヒマラヤ」
- 障害をもって生まれた3男、5年7ヶ月での別れ

私は「*生きることの意味*」を知ることができた

自身のために生きることの空しさ
自分の命を捧げられる人のために生きることができたら、それは幸せな人生であった」と。

人生はいつも山登り

- 山頂　＝　その時々の目標
- 荷物　＝　その時々に背負っている責任
- 登山　＝　苦しみに耐えて目標を目指す

■楽しみは後からやってくる（だから最初は苦しい）
■一つの目標が終わると、次の目標が現れる
■究極の目標　→　実は「・　・　何もない」

だれも人生の予知はできず、
苦しくもあり、また楽しくもある

最後に！

長時間のご静聴ありがとうございました

2004年6月5日

山手学院中・高等学校　土曜講座

父母の会

田中　文夫